

556-204



1200501510928

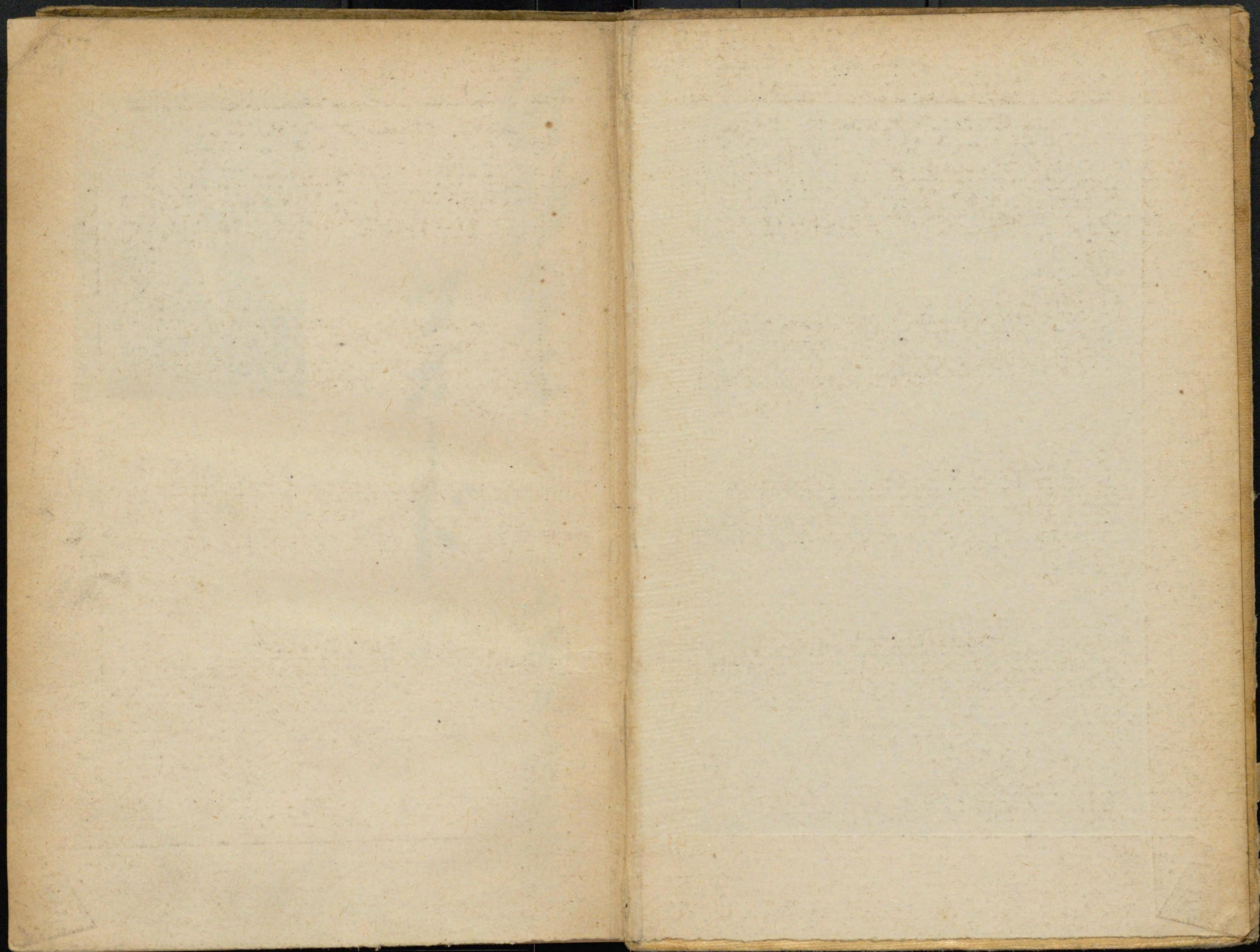
6

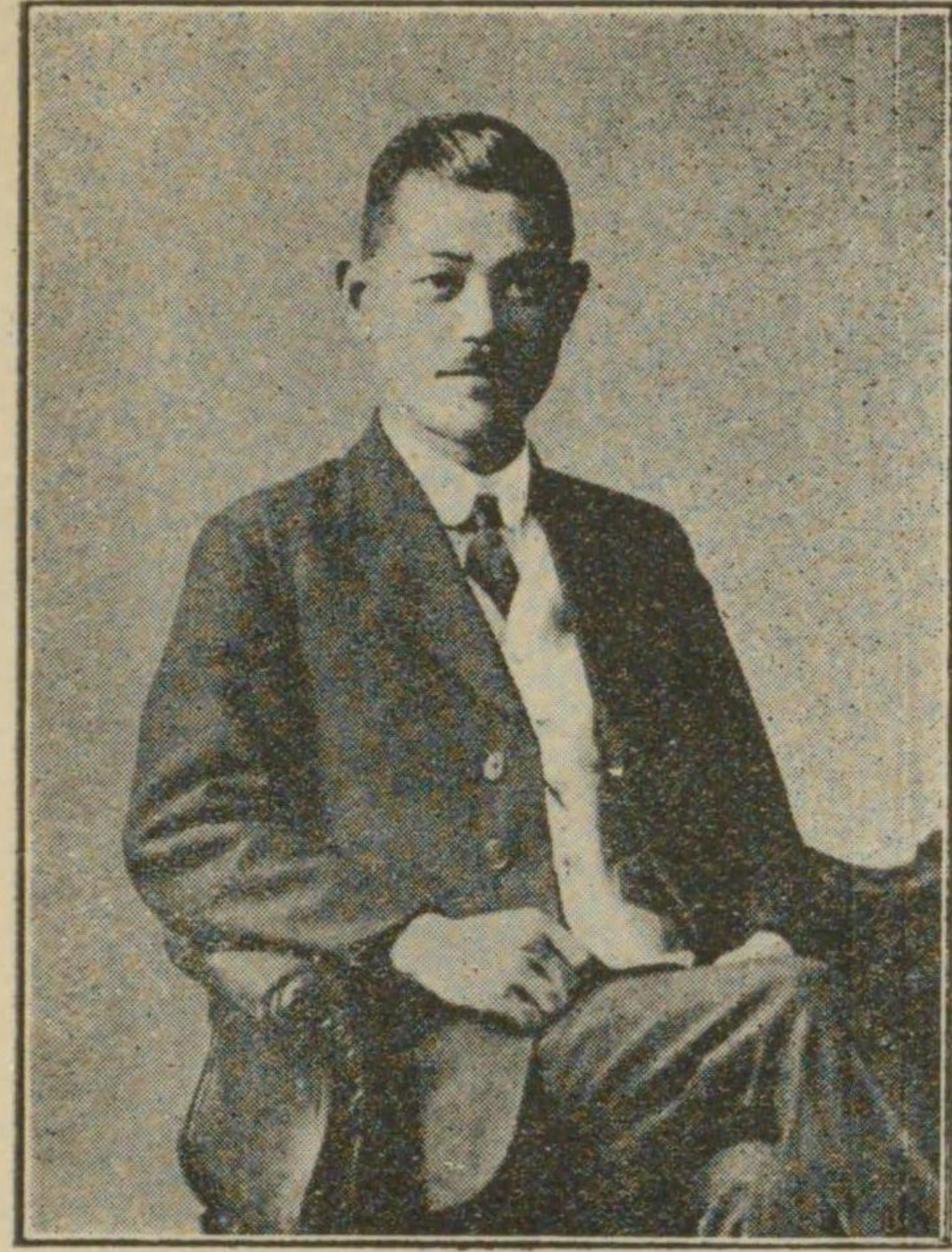
204



自動車物語

田中少佐著



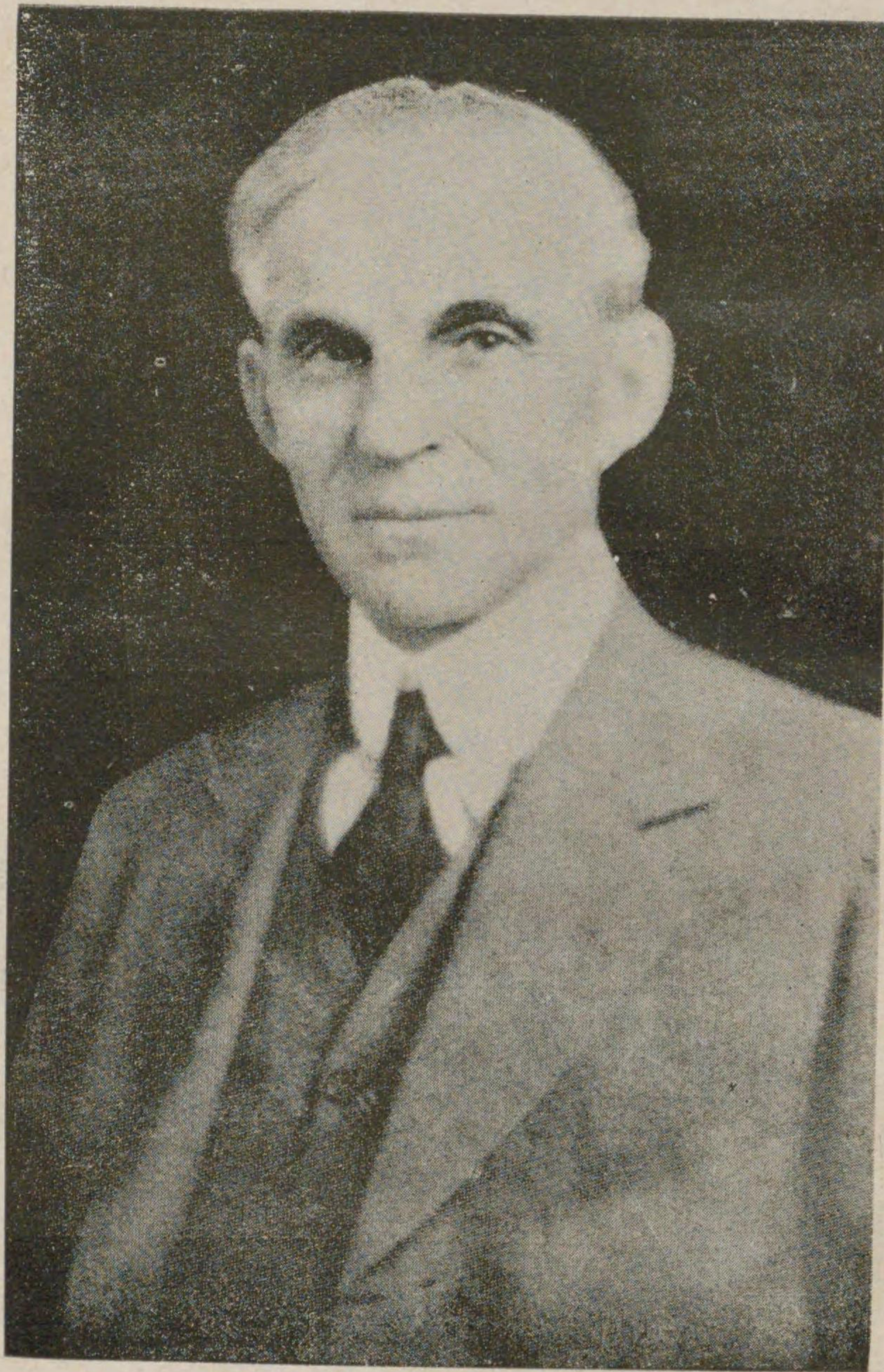


自新集

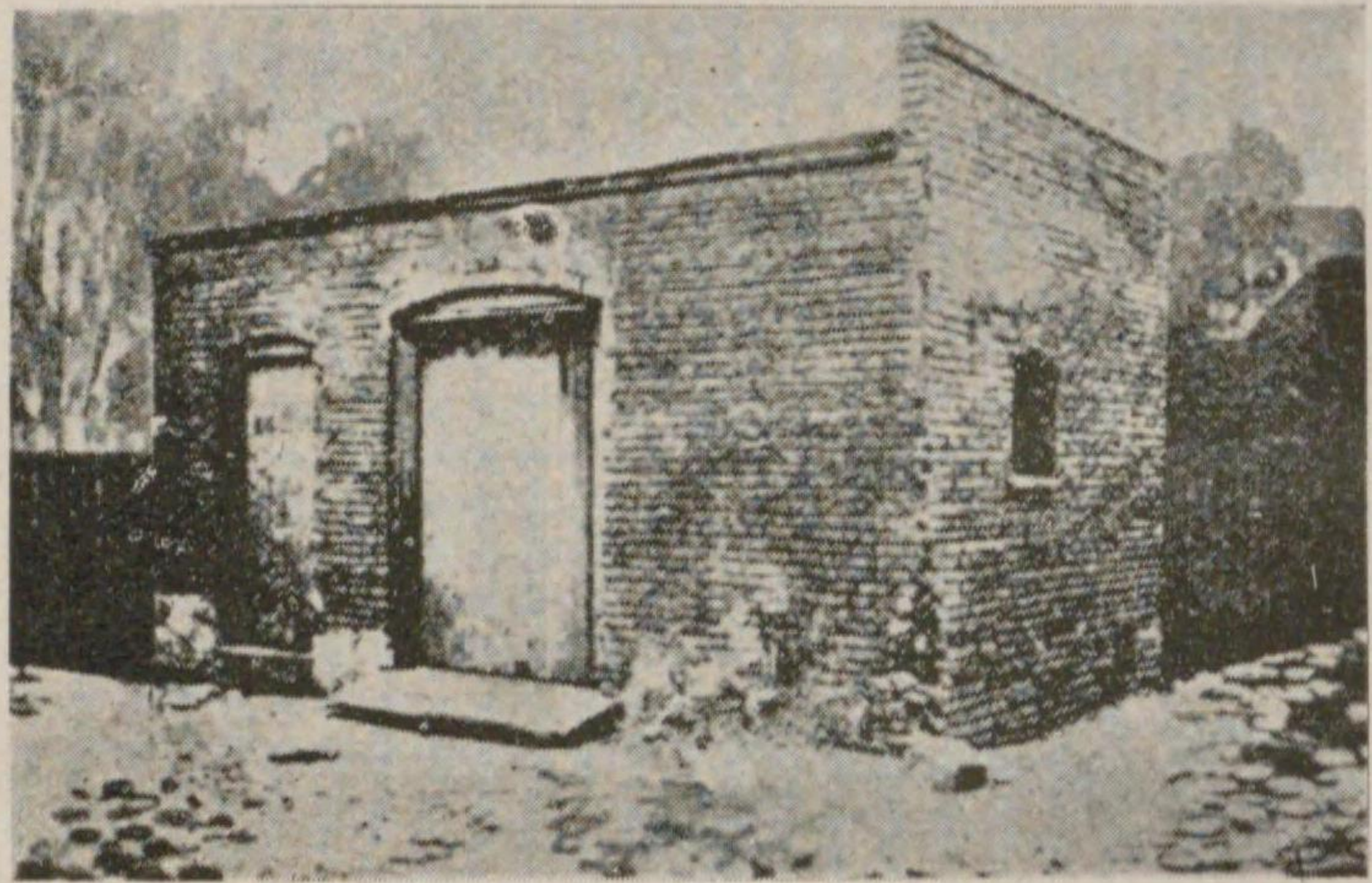
ノオード

山田少佐著

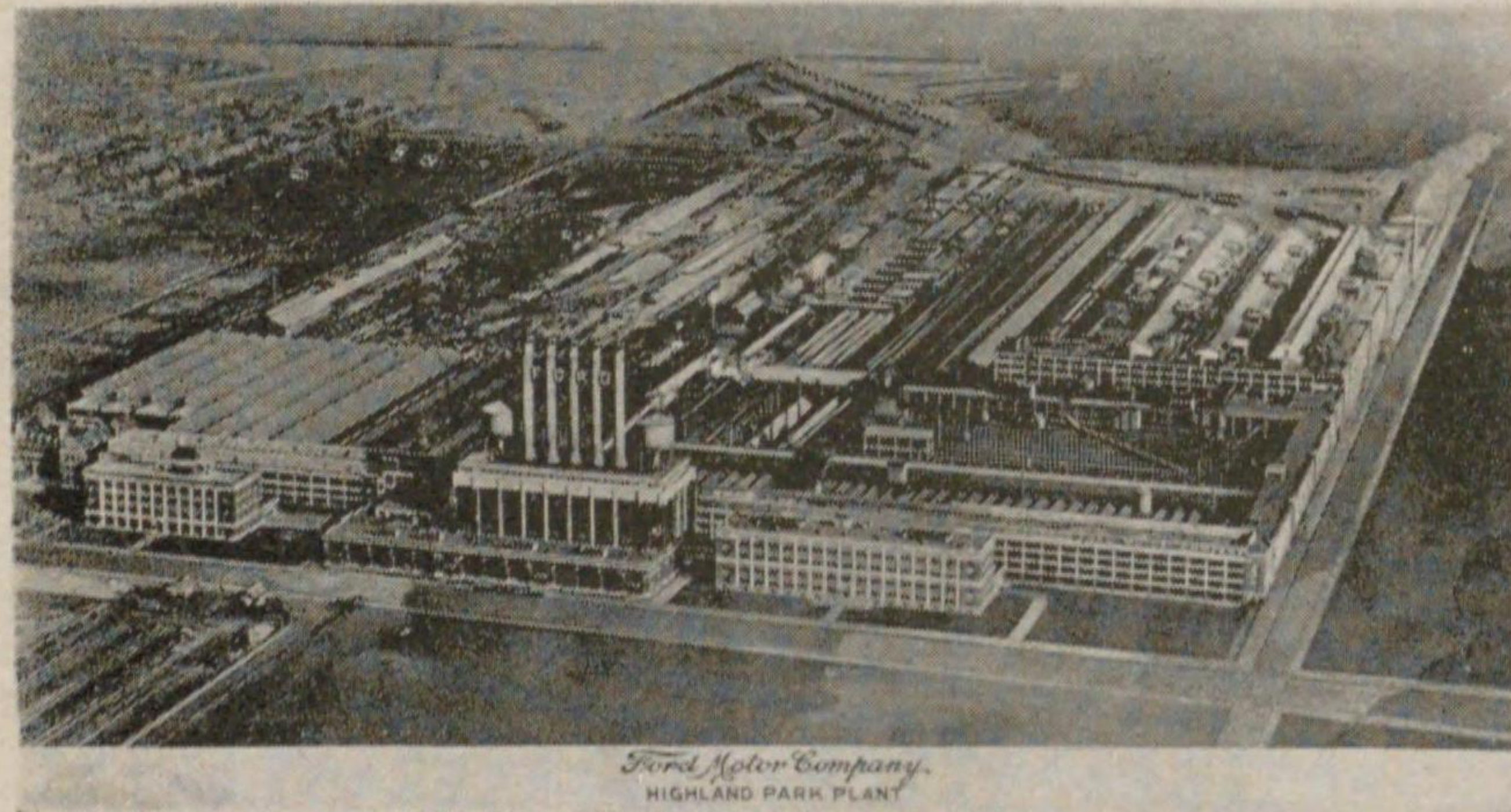




ヘンリー フォード氏



フォード自動車會社最初の工場



現在のフォード自動車工場

青年諸君へ

偉人英雄の精神と其事蹟とを傳へて誤らざれば、青年諸君を感化する力は蓋し偉大なるべし。

世界産業界の俊傑、自動車王ヘンリー、フォードは、人格者としても、發明家としても、事業家としても、あらゆる方面より觀て實に天下の偉人である。

而も其成功の蹟をたゞぬれば、丁稚小僧を振出しにあらゆる艱難と戦ひ、奮闘努力の結果今日の成功を獲たのである。その數奇に富むフォードの奮闘の歴史は、必ずや青年諸君を裨益すること疑なかるべし。而してフォードの立志成功に依つて觀るも貧困は決して懼るゝに足らず、恐るべきは寧ろ却て富貴なるにある。古今東西に亘つて貧困に身を起し絢爛たる成功の樓閣を築き上げた其例多し、就中ヘンリー、フォードはその第一人者である。故に何人も確乎た

る覺悟を以て苦學力行せんか、必ずや成功せん。

此の意味に於て自分は、ヘンリー、フォードの人格と其の人格が産んだ事業とを簡易に記述し、前途有望なる青年諸君に之を傳へて、その立志の動機となり、その奮闘に刺戟を加へ、以て益々發奮興起し、臥薪嘗膽の辛酸を突破して將來諸君が、第二第三のヘンリー、フォードたらんことを熱望のあまり、此書を我が敬愛する青年諸君に呈す。

元より自分は、文章を本職とする操觚家ではない。然しながらヘンリー、フォードの精神は、之を傳へて誤らぬつもりである。春秋に富み希望に燎ゆる青年諸君よ。諸君は本書により、フォードの眞精神を知り、之に感激し、奮起し、大成を期せられよ。然らば著者の満足之に過ぐるものはないのである。

大正十五年九月大震災記念日

山田少佐

立志物語 自動車王フォード

目次

- 一 幸福は勤儉から……………(一)
 - 二 偉人こそその母……………(二)
 - 三 自己の特性を養へ……………(三)
 - 四 最も適した職業を選べ……………(五)
- ヘンリー、フォードの丁稚奉公

五 十九歳の模範技師……………(六七)

不動のエンヂンとヘンリー、フォード

六 世界の農業に革命を興へたフォード……………(七九)

機械農業を實行してゐるフォード農場

七 フォード、父の農園に歸る……………(九五)

ヘンリー、フォードの結婚

八 光明は希望から……………(一〇七)

ヘンリー、フォードの最初の自動車

九 熱する者は狂へる如し……………(一二五)

フォード再び自動車の製作にかゝる

十 自動車は誰が發明したか……………(一二七)

フォード最初のガソリン自動車を作る

十一 最大の努力は最大の成功を生む……………(一三七)

ヘンリー、フォードは遂に自動車を完成した

十二 有名な自動車競争……………(一四九)

生命がけの努力で一躍名選手となる

十三 眼先の利益を捨て、驀地に進め……………(一六三)

フォードは遂に眞の使命に奮起した

十四 世界をアツト言はせた九百九十九號……………(一七七)

魔王の如き勇者バーネー、オールドフィールド

十五 フォード自動車會社はだうして出來たか……………(一九二)

世の嘲を受けながら何處迄も奮闘するヘンリーフォード

十六 フォード自動車會社の發展振り……………(二〇九)

社會奉仕でフォードは世界一の大金持になつた

目次

終

物立志 自動車王フオード

陸軍歩兵少佐 山田 忍 三 著

幸福は勤儉から

—勤儉力行て家を興したヘンリー、フオードの父—



世界に於ける産業界の偉人である自動車王ヘンリー、フオードの名は、今大空に輝く太陽の様に、世界の隅々迄も輝きわたつてゐる。

現在、これほど名高いヘンリー、フオードも、フオード自動車會社も、千九三年の春頃には、彼の住んでゐるデトロイド市の人々でさえ「狂人發明家の夢

一、幸福は勤儉から

一

だ」と嘲笑つてゐた。輕蔑しきつてゐた。それが僅か二十何年の間に一躍して億萬長者と呼ばれるほどの大金持になつて、石油王ジョン、デー、ロツクフェラーでさへ「近代産業界の奇蹟」とまで激稱するほどに、世界の人々に驚異の眼を見張せたのである。

實際何處の金鑽でも、此の世が創つてから、こんなに澤山な財寶を人間に與へた例は、まだ曾つて一度だつて聞いたことがない。ヘンリー、フォードの此の奇蹟的な成功は、確に世界の奇蹟である。

北アメリカ合衆國、ミシガン洲の片田舎に百姓の子として生れた彼が、これこそ天が自分に授けてくれた眞實の仕事だと確く信じて、十六歳の少年の時、自ら進んで機械工場に丁稚奉行に這入つてから、寄せては返へす世の荒浪と闘ひ、あらゆる艱難辛苦を審さに嘗め、遂に我々の想像も及ばない程の大成功を世界の上に築き上げて、世界最大の富を贏ち得た、其の數奇に富むヘンリー、

フォードの生涯は、眞に世界の立志美談中の美談である。

そこで、偉人ヘンリー、フォードの人格と、その人格が生んだ事業と、その底を流れて常に一脈の光を放つてゐる、偉大なる力の幾分を傳へるに先だつて其の偉人を生み、偉人を育てた双親のことからまづ述べることにする。

北アメリカ合衆國、ミシガン洲、デトロイド市から西の方角に九哩ばかり、デイヤボーンに程近いところに、かなり裕福な百姓メリー一家が住んでゐた。

千八百四十一年(我が國の天保十二年、仁孝天皇の御代に當る。)の或る日のこと、此のメリー家に時ならぬ幸福が訪れて、玉の様に麗はしい女の子が生れた。双親の悦は譬へるにもものもなく、メリー、リトゴットといふ美しい名前をつけて蝶よ花よと可愛がつて育てた。此の女の子こそ、後の自動車王ヘンリーフォードの母親である。

丁度その時分、メリー家の近くに引越して来た一大家族があつた。彼等は、此の土地へ移住する迄は、生れ故郷のイギリス、アイルランドのブラントン附近で、先祖傳來鋤鍬をとつて百姓をしてゐた。長男を、ウイリアム、フオードと云ひ親子七八人暮で、非常に賑やかな家庭だったが、彼の家はメリー家の様に裕福ではなかつた。だからウイリアムの父は生活のために常に頭惱を休める時がなかつた。或る時彼は、旭の昇る様な勢で、ます／＼盛んになつて行く遠いアメリカの地を思ひ浮べて、

「さうだ。アメリカへ行かう！」

其處には黄金も土地もころがつてゐるんだ！

子供の幸福の爲めにアメリカへ行かう！」

と彼が、確い決心の臍を決めて、住み慣れた故郷ブラントンの地を離れ異郷アメリカに移住したのは、丁度ウイリアム、フオードが十五六歳の少年の時であつた。

あつた。

フオード一家は、憧憬の國、アメリカに移住してからも矢張百姓に勤んでゐた。父が家族のために鋤をすれば、ウイリアムも亦彼處此處の地主に雇はれて行つた。母親も弟も妹も、皆夫々わが家の爲めに一生懸命に稼いだ。

光陰は矢の如く、はや五年は、一家の勤勞を積んで夢の様に過ぎ、生活も段々樂になつて来た頃には、ウイリアムは、もう立派な青年になつてゐた。

彼は、正直で眞面目で、陰陽なく忠實に働く男であつたから、何處へ行つても非常に評判がよかつた。それから間もなく、メリー、リトゴットの父からも大變に信用されて、やがてメリー家に住み込むことになつた。

「ウイリアム！お前は、馬を引いて行つて昨日の麥畑で、あの仕事の續きをやつてくれ。」

「ここが片付くと、俺も直ぐ後から行くでな。」

「かしこまりました。御主人！」

「それから、あの隣の畑だがな、あれはなるべく深く鋤く様にしてくれ。」

「いつか、御主人が、何か野菜でも作らうかと、お仰つたあの畑ですか？」

「あゝ。さうだ！」

「あの畑ならば、昨日の夕方すつかり済ませました。」

「さうか。そりや随分涉つたものだな。」

「といふ主人の心の裡には、喜が泉の如く溢れ出た。」

メリーの父は、これ迄長い間、随分多くの作男を使つたが、この作男も大低皆な言ひ付けられたことさへ碌々満足にはしなかつたのに、ウィリアムは、何時も主人のためを思つて、例へ主人から言ひつけられなくとも、やらなければならぬ仕事があれば少しも骨惜をせず、先から先へセツセと片付けて行つた。やがて彼は、馬の手綱を引いて出て行つた。主人は其の健康と元氣にみちみ

ちた後姿を見送りながら、

「實に感心な男だ！ 何日でも陰陽なく能く働いてくれる。」

と獨言を言ふのであつた。

かうして、日とともに主人の信用が、彼の上に深まつて行くのは、言ふ迄もなく其の人格の底を流れ、心の奥底に絶へず輝いてゐる正直の徳の光である。さうかうしてゐる内、はや數年は夢の如く流れた。彼はその間に勤勉と儉約とから、年の若い者には多過ぎるほど澤山の貯金を拵へた。

「御主人！ 指折り數へてみると、私が御宅へ参りましてから、丁度足掛六年になります。」

「ふーん。もうそんなになるか！」

月日の經つのは早いもんだ。ほんの一昨日か、昨日の様な氣がするのにな……

「いろいろ御主人から目をかけて頂いたもので、随分澤山貯金が出来ました。」
と言ひながら彼は、大切に藏つてあつた、自分の貯金帳を主人に見せた。

「うん、こりや豪氣だ！。これでこそ始めて世話價值があつたといへる。」

しかし考へて見れば、俺の力ぢやアない。皆お前の正直の徳の現れなんだ。」
かくて主従は、互に其の功を譲り合ひながら、悦び合ふのであつた。

ウイリアムは、その金で百姓には一番大切な土地を買いたいと申出た。メリーの父は、その立派な心掛にすつかり感心して、益々ウイリアムを深く信用するとともに、大事な自分の土地を安く譲つてやつた。そこで、ウイリアムは、主人から四十エーカー（一エーカーは、我が國の約四反二十四歩に當る）の土地を買ひ受けることが出来たのであつた。

「最善の快樂は、任務を果したる後に來たる。」といふ金言があるが、ウイリアムの勤勉と儉約とは、文字通りに慰安と快樂とを彼に與へたのであつた。

そこで、ウイリアム、フオードの父親が「アメリカへ行かう！。其處には黄金も土地も轉つてゐるんだ！」と確い決心をし故郷ブランドンの地を捨て、アメリカに移住した目的が、長男ウイリアムによつて達せられたわけであるから、言ふ迄もなく双親の悦は一通りではなかつた。それと同時に親孝行な彼は、双親の悦ぶ顔を見ると、今迄よりも一層張合が出て、前の日に自分の畑で鋤をどると、その翌日にはメリーの父の畑で馬を遡ふと言ふ様に、骨身を惜しまず一生懸命に働いたので、彼の一家には段々多くの幸福が訪れ、家庭は春の様に楽しく笑ひ聲の絶へ間がなくなつて行つた。

ウイリアムが、かうして愉快に浸りながら常に陰陽なく働いてゐる中、十五六年の月日は瞬く間に過ぎ去つて行つた。そして彼は主人から其の一人娘の婿に選ばれて、芽出度結婚の式を挙げたばかりでなく、二百エーカーといふ非常に広い土地をも相續することが出来たのであつた。彼の悦は、譬へるにもものもな

つたであらう！

かく、ウイリアム青年が、主人から我が子の様に信用されたのも、僅か五六年の間に四十エーカーといふ、かなり広い土地を買ふことが出来たのも、メリ嬢と結婚して四百エーカーの土地を相続することが出来たのも、皆彼の正直と努力との賜物である、眞に正直と努力とは、幸福を生む母である。

人間は、何日でも、何處でも、正直で勤勉でなければならぬ。飽迄も自分の本務に忠實でありさへすれば、招かずとも幸福は自然に與へられるものである。蔭かぬ種は生へぬの道理、僥倖といふも決して偶然ではない。何時か何處かで、必ず拂はれた犠牲、勤勉の賜物に外ならぬのである。

後の自動車王ヘンリー、フォードが生れたのは、丁度彼の両親ウイリアム、フォードと、メリー、リトゴットとが、春の様に楽しい結婚生活に這入つた翌年の、千八百六十三年七月三十日（我が孝明天皇の文久三年に當る）で其の時、母は二十二歳、父は三十六歳であつた。

二 偉人ごその母

——少年時代の教育と感化が人の一生を支配す——

人間が、偉い人物になるのには、教育の力と特性の涵養とが何よりも一番大切であるが、父母の遺傳とその感化の力も亦決して見過してはならない。

「その親にしてその子あり」とは昔から廣く世の中に知られてゐる言葉であるが、實際又此の世の中で偉人とか、英雄とか言はれてゐる人の双親には、非常に優れた人が多かつた。殊にその母親に一層偉い人があつた。

あの名高いコロンブスが、アメリカ大陸を發見してから、ヨーロッパ諸國の人々は、先を争つて、アメリカへ、アメリカへと集り、互に其の領土を擴げるのに血眼になつてゐたが、やがてそれが激しい争鬭に代り、遂にイギリスとフランスとの間に戦争が起つた。そして最後の勝利をイギリスが獲てからといふもの、長い間アメリカはイギリスの屬國になつてゐた。けれども勝ち誇つたイギ

リスは、好き勝手な我儘をしてあらゆる壓制を、アメリカの上に加へたので、住民は非常に苦しめられたのであつた。

何時の世にも劇しい壓制の後に興るものは必ず強い反抗である。

「アメリカを獨立せしめよ！」

「我々に自由を興へよ！」

と叫ぶ血を吐く如き住民の聲は、野にも山にも漲り、いやが上にも人氣は沸騰して、恰も鼎の沸くが如く、北アメリカ全土をあげて騒動の巷と變つた。

此の時、自由と正義の鐘を打ち鳴らし、あらゆる艱難辛苦と闘ひ遂に獨立の目的を達した英雄こそ、西曆千七百八十九年（我が寛政元年）北アメリカ全体の住民から選舉され、抑々最初の大統領となつたジョージ・ワシントンである。ワシントンは、政治家としても、愛國家としても實に優れた人で、眞に偉人中の偉人であつたが、其の母メリー、ワシントンも亦誠に偉い人であつた。搖籃を

揺すものは天下を揺すと能く言ふが、眞にワシントンの母の立派な感化の力がやがて其の子ワシントンに天下を揺さしたのであつた。

此のワシントンと相並んだ偉人に、十六代目の大統領アブラハム、リンカーンがある。リンカーンは、アメリカ代々の大統領の中でも眞に飛び抜けて優れた大人物で、彼がアメリカに盡したその大なる功績は、今更ここに述べる迄もなく、普く能く人の知るところであるが、その大なる功績を生んだリンカーンの偉大なる人格は、その母ナンシー、ハンクスが感化の賜物であると言はれてゐる。

名大統領アブラハム、リンカーンと殆んど同時代に、イギリスの大宰相、ウイリアム、エワード、グラットストンがある。それから又進化論といつて、あらゆる學問の原理になつてゐる非常に大切な學問を發見して、長く世界の人の爲に貢献した偉人ダウインがあるが、此の二人、は米の大統領リンカーンとともに、第十九世に於ける世界の人文史を飾つて居る、三大人物だと言はれる程

の偉い人々であるが、その母達も亦非常に賢い人々であつた。

又英佛戦争の時、勝ち誇れるナポレオンのフランス聯合艦隊を、かの名高いトラファルガーの大海戦に打ち破り、「英國の各人は、其の職分を盡さんことを期待す」と、御國の興廢を此の一語に罩めて、遂に雄々しくもトラファルガー大海の藻屑と消え、永くイギリスの國史の上、に日星の如く其の名を千載に留めた大英雄、時の司令長官ホレーシヨ、ネルソンの母カザリンも、眞に偉人の母に背かぬ偉人であつた。

其他ローマ大帝國を、世界の上に建て大英雄の名を、世界の隅々迄も轟したジュリアス、シーザーの母オーレリアも、萬世不出の英雄として我々日本人の誇とする豊太閤秀吉の母も、日本六十餘洲を經廻つて悪い政治をたゞし善い政治を布いて、人民から恰も慈父の如く慕はれた、最明寺時頼の母松下禪尼も、西郷隆盛や乃木大將の母も、又世界三大聖人と仰がる、釋迦の母魔耶夫人も、基

督の母マリヤも、孔子の母も、ロシヤの文豪レオ、トルストイの母も、凡そ偉人英雄と呼ばれるものの母親で偉くなかつたものは無いのである。

現在、世界の津々浦々までも、日星の様に輝きわたり、此の世に於ける産業界の王者として、多くの人々から持て囃されてゐる、本篇の主人公ヘンリー、フオードの母メリー、リトゴットも亦、眞に其の親にして其の子あるを思はせるほど偉い人であつた。

そこでその母が、その子ヘンリー、フオードを、その少年時代に、如何に教育したかは、極めて興味あることである。その消息の二三を物語らう。

ヘンリー、フオードの通つてゐた小學校は、「スコットランド人殖民學校」と云つて、重にイギリスから米國に移住して來た者の子供を教育する目的で建てられたもので、デイヤポーンの附近にあつた。

ヘンリー、フオードは、丁度五年六ヶ月の年齢になつた千八百七十一年一月

十一日に此の小學校に入學した。此のスコットランド人殖民學校は、彼の家からは二哩半もあつた。で六歳に満たない少年にとつては、かなり遠い道程であつたけれども、何事にも勉強家であるヘンリー少年は、雨の降る日も、風の吹く時も、怠らずに空罐の中に辨當を入れ、それを振提げては通つて居た。その辨當の中には、いつも母が心盡しのサンドウィッチが這入つてゐた。上等の菓子は却て子供の爲めには善くないと、母は確く信じてゐたので、至極あつさりした衛生的で、餘り甘くはないが、非常に滋養に富んでゐる良質のパンと牛肉とで、サンドウィッチを拵へてくれた。けれどもヘンリー少年は非常に菓子が好きであつたから、辨當には、サンドウィッチよりも美味しいケーキかパイが欲しかつたのであつた。

ところが、ヘンリーの仲良しの友達に、菓子好の家庭から來る子供があつた。その友達の辨當は、いつでも大低白衣を澤山に振りかけた美味しさうな菓子だつたので、ヘンリーは子供心にそれが羨ましくつてならなかつた。そこで或る日のこと、彼は友達に對つて、

「ねえ、君！僕の辨當と君の菓子と取り替へてくれない？」

「ヘンリー君、そりや取り替へてもいゝけど、悪いからよさうよ。」

「そんなこと言はないで、どりかへてくれ給へな。ねえ君！いゝだらう。」

「それぢやア、取り替へよう。」

「やあ、ありがたう！」

到頭かうしてヘンリーは、喰べたいと思つてゐた菓子と取り換へることが出來た。だから非常に喜んだことは言ふ迄もないが、彼の友達も常に菓子好の家庭にゐて四時菓子ばかり食はされてゐたので、上等のサンドウィッチと取り替へたのを、大變に喜んだのであつた。

それからといふもの殆んど毎日の様に、二人は辨當の交換をして楽しんで

ゐた。ところが、或る日のこと、ヘンリー少年は、突然病氣になつて學校を早引して、家へ歸らなければならなかつた。

そこで母は、親切に彼を看病しながら、

「ヘンリー！。私は、お前を病氣にする様なものは、一つだつて興へた覺は
ありませんよ。お前は、他所の子供からバイカケーキでも貰つて、喰べてゐ
たのでせう！。」

と何もかも知りぬいて居る様に言ふのであつた。母は更に語を繼いで

「ヘンリー！。もう出来て了つたことは仕方がないが、お前は、自分の健康と
幸福を考へるならば、これからは決してそんなことをしてはいけません。」

母が彼を諭す言葉は、愛に満ちて優しくあつた。けれどもそれだけに、ヘンリーの心には強く響いた。そして病氣が苦しくなればなるだけ、母を欺いた罪を滲々と悔いて、

「もう決してお母様の言ひ付けには背くまい。」

と心に深く誓ふのであつた。

それから後、母は、ヘンリーがどんなに菓子を食べたいとせがんでも決して興へなかつた。ヘンリーも亦其後は常に能く母の教訓を守つて、一度も母を欺いたことはなかつた。實際後にも先にも彼の生涯を通して、これが唯一度の出来事で、又唯一度の病氣であつた。

ヘンリーの母は、世の大低の母親が子供を愛する以上に、我が子を愛してゐた。眞に心から子供を愛する術を知つてゐた。だから我が子の幸福のためだと考へた場合には、一時どんなに子供から厭られる様なことがあつても、又どんな犠牲を拂つても、飽迄も子供の爲めに盡したのである。

これも亦ヘンリーの小學生時代の出来事であるが、或る春の日、彼が弟妹五人と、朝の食卓を楽しく圍んで居ると。

「ヘンリー！。お前は今日、學校が退けてから、お友達と一緒に泳ぎに行つてはなりませんよ。」

氣候が、餘り早すぎるので、水はまだ冷たいのですから……」

と母は、突然に言ふのであつた。ヘンリーは、驚きの眼を見張らないわけにはゆかなかつた。

「わかりましたね。お前は今日、學校から直ぐ家へ歸つて來るのでですよ。」

「はい。よくわかりました。」

と彼は、答へるより外はなかつた。

そこでヘンリーは、到頭友達から意氣地なしと言はれなければならなくなつて了つた。とわけは丁度其の頃上天氣が一週間以上も續いて、恰も少年達の心を誘ふ様に春の暖い光が、川にも丘にもたゞよつてゐた。

ヘンリーは、丁度母から注意された前の日、いつもの通り大勢の友達と伴れだつて學校から歸つて來た。するとその中の一人が、

「ねえ。君達。明日學校の歸途に、いつも行く川へ泳ぎに行かないか？」

「あゝ。行かう！」

「僕も、行くよ。」

と大勢の友達は、一も二もなく皆賛成したけれども、ヘンリーだけは、何も言はずに黙つてゐた。

「どうしたんだ。ヘンリー君！。君は行かないのか？」

「あゝ。僕は行かないよ。お母アさんに叱られるから……」

「お母さんに叱られるつて、随分意氣地なしだなア。僕等だつて叱られるけど黙つて行くんだ。」

かうして大勢の者から、意氣地なしだと言はれると、何事にも負け嫌ひな彼

は、それが残念でたまらなかつた。母には濟まないと思へながらも到頭彼は泳ぎに行く仲間入をして了つたのであつた。

けれどもこんな計畫があることを少しでも話したが最後、どの親達だつて決して許してくれないことは解りきつて居たので、彼等は互に極内證にすることを堅く約束した。だから誰一人として口外するものはなかつた。ヘンリーも勿論何も言はなかつた。けれども母は、それを能く知つてゐたのであつた。ヘンリーの母には、かうしたことは決して珍らしくはなかつた。いつでも大低子供のことには能く知つてゐた。わが子の心を能く讀んでゐたのであつた。

「子を見ること親に如かず。」といふ金言があるが、親ほど能くその子を知つてゐるものはない。其の時其の場合の出来事は言はずもがな、賢い親ほどその子の遠い將來までも能く知つてゐるものである。

ヘンリー、フオードが、後に世界の大人物になつてから、親しい友達の一

人に、

「僕は、丁度母が僕に望んでゐた通りにやつて來た。」

といつてゐるが、これは彼が、母の心を知つてゐることを物語つてゐると同時に、母も亦能く彼の遠い將來までも知つてゐたことを、裏書する何よりの證據である。

凡そ、此の世の中で、我々人間にとつて何が一番大切だと言つて、子供の時の教育や感化の力は、多大切なものはない。なせならそれは能く人の一生を支配するからである。

ヘンリー、フオードの母は、その大切なことを能く知つてゐた。だから我が子の將來の事を思つて、子供達が學校から歸つて來ると、決して遊ばしてはおかなかつた。夫々役割をきめて皆な仕事をさせた。ヘンリーの仕事といふのは

馬を世話することであつたが、彼は大人になつてからも、其の仕事が大嫌である様に子供の時も大嫌だつた。そして彼の弟妹も亦大抵好かない仕事をしなければならなかつた。

そこでヘンリーや弟妹が、自分々々の仕事に就て、少しでも不平を言ふ様なことがあると、母は、

「しなければならぬ。といふことが却てお前達の爲めになるのだから、いやだなごと、少しでも考へてはならないよ。」

「ヘンリー。又お前は、いや／＼やつてゐるね。」

「いつもいふ通りに、それはいけないことですよ。どんな嫌な仕事でも、喜んでおやり。さうすると知らず識らずの間に、勇氣や忍耐が養はれて、自然

「お前の爲めになるんだから、サア／＼おやりなさい！」

「僕はこんな事をするのは嫌だ！」といふことは、決してお前を幸福にはしないのだよ。」

と母は常に言ひ聞かせるのであつた。しかしヘンリーには、何時迄経つてもそれは決して好きな仕事にはならなかつた。けれども彼は、しなければならぬ仕事として、毎日學校から歸つて來ると、母の訓誨を能く守つて怠らずに馬の世話をしたのであつた。此の幼い時の母の教と彼の努力とは、ヘンリー、フオードの心の中に、やがてあらゆる艱難辛苦に打ち勝つべき力を與へ、彼の生涯に大きな光を放つ原因になつたことは言ふ迄もない。少年時代の教育修養ほど、我々にとつて大切なものはないのである。

かうしてヘンリー、フオードの母親は、子供達にしなければならぬ仕事を必ずさせたばかりでなく、自分自身も亦大勢の家族の爲めに、洗濯や、麵麩

焼や、料理針仕事、掃除などと數へきれない程澤山な、一つだつて面白さうでもない仕事を、何時でもやらなければならぬ自分の仕事として、それからそれへと片付けて行つたのであつた。しかも一度だつて不平一つ言つたことはなかつたばかりでなく、母は非常に規帳面な人であつたから、其の日の仕事は必ずその日の中に済した。だから彼女の家庭は、何時でも、何處でも整然と奇麗に片付けてゐた。ヘンリーの母は、かうして常に自分の役目を堅く信じ人間の眞實の本務を果して、家族全体の模範になつて居たのである。

凡そ教育の中で、身を以て教へる教育は、其の感化の偉大なものはない。印度の釋迦、支那の孔子、西洋の基督など、皆その爲めに彼等の一生を費したのである。ヘンリー、フオードの母も亦能く身を以て我が子を教育したのであつた。此の優れた母に育てられたので、彼はその生涯を通うして、どんな困難どんな苦痛に出遭つても、泣事一つ言はず、一生懸命に「やらなければならぬ仕事

事に」慕地に勢だし、遂に其の名を世界の津々浦々迄も轟す程の大成功を贏ち得たのであるが、之れは元よりヘンリーの倦むことを知らない努力の賜物であり、又自分の性分にひつたりと合つた天職に向つて進んだからであることは言ふ迄もないが、其の少年時代に於ける母親の偉大なる感化の力も亦決して見遁してはならないのである。

ヘンリー、フオードの母は、父ウイリアム、フオードが七十五歳迄も長壽をしたのにひきかへて、不幸にも三十五歳の若い身をもつて此の世を去つたが、此の世界に絢爛たる成功の樓閣を築き上げた立志傳中の人ヘンリー、フオードを生み、且つ之を育て上げた其の大なる功績は、其の子ヘンリー、フオードの事業とともに、永く世界の歴史の上に赫灼と光を放つであらう。

三 自己の特性を養へ

——自己の才能を發揮したヘンリー少年——

ヘンリー、フオードは、小學校に通つてゐる中、何時とはなしに機械好になつて、學校でも家庭でも機械のことはかり考へる様になつた。

丁度其の時分、フオードは、生れて始めて一つの學術雜誌を見付けた。それは英國ロンドンで發行する「科學の世界」と呼ぶものであつたが、彼は毎日の様にそれを讀み耽つたのである。それからどりいれる新知識は益々フオードを機械好にし、其の研究心を向上させるばかりであつた。

或日フオードが、戶外で遊んでゐると、大の仲良である友達のジョン、フラワーが、得意満面に歡び勇んで三輪車に乗つてやつて來た。

「ジョン君！君！いゝものをもつてゐるね。お父さんに買つて貰つたの？」
「ちがうよ。お母さんだ。」

三、自己の特性を養へ

「あどで、僕にも乗せてくれない？」

「あゝ、のりたまへ。」

と言ひながら、ジョンは益々得意になつて三輪車を乗り廻してゐたが、やがてヘンリーの所へやつて来て、

「さア。乗りたまへ。ヘンリー君！」

「ありがたう。ちやア君！借るよ。」

「あゝ。ゆつくり乗りたまへ。」

ヘンリーは、愉快な氣持に浸りながら、借り受けた三輪車を乗り廻してゐたが、彼は絶へずその機械の構造に鋭い注意の眼を見張ることを怠らなかつた。それから後二人の少年は、殆んど毎日の様に學校から歸つて來ると、夫々異つた心持で、三輪車を乗り廻すのを何よりの樂しみにしてゐた。ジョンは、それが自分のものであるといふ誇と、それと乗り廻すことに非常な興味をもつて

ゐたが、ヘンリーの興味は、そんな平凡なことではなく、其の機械に就て色々考へてみることであつた。

實際ヘンリー、フォードは、機械ならば、どんな機械でも好きだつた。だから一度三輪車に乗つてからは、何時もその機械のことばかり考へる様になつた。

「足踏では疲れて了つて、迎も遠乗が出来ない。これに何か機械を仕掛けたら、もつと愉快に、もつと早く走ることが出来るにちがひない。」

子供ながらもフォードは、こんなことも考へた。それからといふもの毎日彼は、すつかり發明家になつたつもりで、かうすればあゝしたらばと、いろ／＼工夫を凝すのであつた。

そして又彼は愛讀してゐる學術雜誌「科學の世界」を披げては、何か三輪車に取り付けて、足や体を働かさずとも、自由自在に車を回轉し、非常に速い速力

で走る様な機械はないかと、皿の様な眼を見張つて、一生懸命に研究するのであつた。

「ヘンリー！おそいですよ。早くお休み！」

と母から毎晩の様に、幾度となく注意されるほど夜も遅く迄、此の雑誌を讀み耽つた。これから又床に這入つてからも、時には夜明け近く迄熱中することは、決して珍らしいことではなかつた。

此の雑誌の中で、フオードの機械好きな心を一番沸きた、せたものは、蒸汽エンジンのことであつた。彼は排氣管だの、氣筒だの、放熱管なぞと、それからそれへと知ることの出来るだけ詳しく研究した。やがてフオードの頭腦の中には蒸汽機關の構造が、すつかり疊み込まれる様になつた。

「さうだ、エンジンだ。蒸汽エンジンさへ据へ付ければ、三輪車が立派に走るのだ。」

と思はず大きな聲で獨語を言つた。此の時、彼の腦漿の中には、三輪車に蒸汽エンジンを据へ付けた自動車、立派に出来上つてゐたのであつた。

そこでフオードは、早速ジョン、フラローを訪ねて、

「ねえ、ジョン君！」

「なに？ヘンリー君！」

「僕ねえ、到頭發明したんだぜ、君！」

「なにを發明したのさ。どんなことだか話してみたまへよ。」

「僕、毎日随分考へたんだがね。ジョン君！」

三輪車に、蒸汽エンジンを据へつけると、足なんかで踏まなくなつて、君！。自動的に走らすことが出来るよ。」

「そんなこと出来るもんか。君！、そりやきつと駄目だよ。」

「なに、出来るさ。必ず出来るんだよ。君！」

ヘンリー少年は、必ず出来るといふ強い自信を以て、飽迄もジョン、フワラ一に向つて主張するのであつた。

「いくら君が、威張つたつて、容易に出来ないさ。それほど出来るくと言ひ張るならば、君、拵へてみせたまへよ。」

「そりや、僕に拵へろたつて無理だよ。拵へたくつてもなんにもないんだもの。」

此場合にもし、ヘンリーに蒸気エンジンを作るだけの材料を與へたならば、よしそれが完全には出来ない迄も、彼は必ず子供ながらも拵へてみようとしたであらう！

けれども、蒸気エンジンのほんの一部だけを作る材料でさへ、勿論買ふ金はなかつた。それが又ヘンリーにとつては非常に残念でならなかつた。だから彼は、鉛筆で紙に圖をかいて、エンジンの説明をするより外に道はなかつたのである。

そこでヘンリー、フオードは、蒸気エンジンの構造から、それがどうすれば自動的に動力を發すことが出来るかを自分の知つて居るだけ、ジョンに詳しく説明した。ジョンは驚異の眼を見張つて、ヘンリーの話を聞いてゐた。

「成程、それなら、三輪車に拵へ付けさへすれば、きつと自動的に走らすことが、出来るね。」

そこで到頭ジョンは、ヘンリーの主張に従つて了つた。それと同時にジョンは子供心にも、ヘンリーが機械のことに非常に詳しいのに驚いて、

「君は、もしかすると技師にされるかも知れないせ。」
と讃嘆のあまり無邪氣なことを言ふのであつた。

勿論僅か十三歳の少年であるヘンリー、フオードが、いくら蒸気エンジンを研究したからと言つて、ジョンの考へた様に技師になれる筈もないし、又必ず完

全に蒸気エンジンを作ることが出来るとは、保証の限りではないが、フオードの機械に關する才能は、既に此の時から彼の心に根強く芽萌え又培はれたことは疑ひのない事實である。

それから後は一層ヘンリー、フオード少年の、科學や、機械に關する研究心は、日を逐つてますます熾んになつて行つた。彼は同じ十三歳の時、水力を應用して動力をおこすことを考へついた。そこで自分の家の近くにある小川に堰を築いて水車を廻すだけの水を溜め、車の軸に土搔の柄を取り付け、軸の一方の端に珈琲の粉碎器を置いて、其の中で土塊を碎く仕掛をした。

すると、隣家のジョン、ミラー老人が、フオード家へやつて来て、
「困るぢやアないか、あんな所に堰なんぞ築いては、俺の穴倉にドン／＼水が這入つて、馬鈴薯がみんな濡れて了つた。」
腐つて終うぢやアないか、一体どうしてくれるんだッ！」

と突然怒鳴り込んで来た。ヘンリーの父は、何も知らず寢耳に水であつたから非常に喫驚した。

「ミラーさん。貴郎は何をいつてるんかね！。俺には一向譯がわからないよ。」
譯がわからないも何もあるもんぢやアない、來てみるがい。」

と言ひながら、生來一酷なミラー老人は、ヘンリーの父の手を取つて、グイ／＼引張つて行くのであつた。父は引かれるまゝに小川のどころまで行つた。成程そこには堰が築かれて、小さな水車が、盛んに土塊を碎いて居た。そこで始めてミラー老人の怒鳴り込んだ謎が解けたのである。

「こりや、だうもすまんこつた。けれどもミラーさん、俺は少しも知らないんだよ。」

これは、ヘンリーの仕業に違ひない。こんなことばかり好きで困つた奴だ！。と父は投げ出す様に言つた。けれども心の裡では、十三歳の子供の仕業とは

思はれないほど巧みに出来てゐたのを見て熟々感心して了つた。

そこで父は、ミラー老人をつれて裏の納屋に足を運んだ。そこには、ヘンリーが、何時もの通り一生懸命に機械弄に興を湧してゐた。

「ヘンリー！、又お前はそんなことをしてるのか！。そしてなせオ前は、あんな馬鹿な悪戯をするのか、いつも言つてるぢやアないか、百姓の忤が機械なんぞ弄り廻して、何になると………實に仕様のない奴だ！。」

なせ水車なんぞ、作るんだッ！。珈琲の粉碎器も何もかもメチャ／＼ぢやアないか。それに隣家の穴倉へ水が這入つて、馬鈴薯がみんな水に濡れちやつたと言つて、ミラーさんが、今怒つて来さすつたのだ。

だうして、あんな馬鹿げた真似をするのかッ。」

彼は俯向ひて黙つてゐたが、やがて恐る／＼父の顔を見上げると、そこには隣家のミラー老人が、父よりもつと恐ろしい顔をして立つて居た。

「お爺さん!!。ほんたうにすみませんでした。まさか、隣家の穴倉へ水が這入らうとは思はなかつたものですから………」

「何だつて、まさか、隣家の穴倉へ水が這入らうとは思はなかつたつて、冗談ぢやアないよ。立派に水が這入つて、馬鈴薯がみんな、濡れて終つたんだ。虚偽だと思つたら、俺と一しよに来るがい。」

ミラー老人は、カン／＼になつて、赭顔を一層あかくし猛り立つて、ヘンリー少年を睨めつけた。そこでヘンリーは詫びるより外に道はなかつたので、幾度も／＼も老人の前に平身低頭して詫つた。父も一所になつて色々詫びてくれた。そして堰きとめてあつた小川の溜を開いてやつこのこと、ミラー老人の苦性を堰きとめることが出来たのであつた。

かうした事件、かうした失敗があつたけれども、却てフオード少年は、それから後ますます機械に親しんで行くのみであつた。

やがて、フオードは水力の應用から轉じて懸時計や懷中時計に非常な興味を沸きたせ、せる様になつた。それから彼は時計の構造を調べるのに非常な苦心をしたが、或日のこと遂に、裏の納屋で、生れて始めて懷中時計を分解した。そのために長い時間が費され又それを組み立てるのにかなり長い日がかつたけれども、此の熱心な骨打は決して無駄ではなかつた。遂にフオードは一目見れば直ぐ何の軸は、何の爲めに作つてあるか、どの車がだうであるかが良く判る様になつた。

そこで、フオード少年には、時計を分解すると同時に、それを元の通り正確に組み立てることも亦容易であつた。従つて時計を直すのには、餘り面倒を感じなかつた。けれども時計修繕をするには、勿論それ相當の道具が必要であつた。そこで彼は母の編物用の針で、小さい螺子廻を作り、古い懷中時計の彈機で、立派に役立つピンセットを作つた。

それから後のことであるが、偶然彼が近所の時計を修繕してやつたのが、非常な評判になつて、

「ヘンリー君！自家の時計は、だうも遅れて仕様がななんだ。君！、すまないが、一寸とみてくれないかね！」

「あゝ、みてあげよう。」

といふ様に隣近所の誰も彼も、少年に修繕を頼む様になつた。そして彼が一度手にかけると、どんなに不正確な時計でも、必ず正確な時計になつて、依頼者の手にもどつて行つた。

「ねえ、ヘンリーさん！此の時計ですが、進むかと思つてゐると、びつたり止まつて終ふんですの、だから一向役にたつないので、困つてゐますんですよ修繕して頂けないでせうかしら？」

「どれ、小母さん！。みせてごらん。」

フオード少年は、近所の小母さんから受取った懐中時計を見て、すぐに其の時計の不正確になる理由や、止つて動かなくなる原因を探し出すことが出来た。

「これぢやア、ダメなもの無理はないよ、小母さん！」

「さう、困ツちまうわね。此の間、町の時計屋で直さしたばかりなんだのに……。」

フオードは、かうして近所の人々のために、無料で時計修繕をしてゐた。又近所の人々は、修繕すやうな時計があれば、何時でもヘンリーの所へ持つて来る。彼も亦喜んでそれを引受けるといつた様な有様であつた。村人達は、懐中時計でも、柱時計でも、一度ヘンリー、フオードの手にかければ、その修繕は完全なものだと言つて評判した。實際彼は十三歳の少年であつたけれども、立派な一人前の時計職工であつた。機械に對する彼の天才は、既に此の時から芽萌えて居たのである。

けれども彼の父は、フオードが近村一般のために時計修繕をしてゐることを知つて、甚だ喜ばなかつた。

「ヘンリー！お前は、なぜ無賃で、時計を修繕す様な馬鹿な真似をするのか？。だうして賃銀をとらないのだ。」

「お父さん！。そりや無理です。僕は本職ぢやアないんですから……。」
「そりや最初から解りきつた話だ。けれどもお前の腕前が、一人前以上に優れてゐると、村の人は誰でも言つて居る。」

それなのに、なぜ、お前は賃銀をとらないのか？。時間をつぶして骨を折つて、無駄で仕事をする様な馬鹿は、此の廣い世の中にもお前ばかりだ。」

フオードの父は、彼がそれ程立派な技術をもつてゐるとすれば、その仕事に對して報酬を受ける資格があると考へてゐた。だからフオードに對つて、その勞務の代償として當然賃銀を受けよと主張したのである。彼の顧客は五六哩も

隔つた近村一帯迄も弘まつた程で、實際ヘンリーの評判はたいしたものであつた。だから父が賃銀を取れと言ひ張つたのも、一面から考へれば決して無理もないことである。

けれども、近所の人々は、料金を拂はずに済めば、それに越す幸福はないと思つてゐたし、又フオードも決して報酬を受けようなどは夢にも考へてはゐなかつた。唯時計を修繕す事が面白かつたのである。フオードは、賃銀のことなど少しも考へなかつたばかりでなく、小學校へ往復するので毎日二哩半も歩いた後、尙屢々デトロイト市まで九哩もある道を馬で飛ばして、其處で時計の弾機とか、他の材料をいろいろ仕入れて来て、それで近所の人々の時計に、完全な修繕を加へてやらうとさへ考へたのである。

かういふ風であつたから、自然近村の人々からは非常に悦ばれたけれども、父の不機嫌は益々増すばかりであつた。だから到頭父は癩癩を起して、

「ヘンリー！ お前は、決してこれから夜外出をしてはならない。

馬鹿げた無駄骨折は、いゝ加減にしろ。明日の仕事の妨だから、今夜からは早く寝るがいゝ。」

フオードは、遂に父から無報酬の仕事で、夜更しをすることを嚴禁されて終つた。父は、彼が無料で時計修繕をすることを不快に感じたばかりでなく、學校から歸つて來ると、終日農園で働いてゐるので、せめて夜間だけは、十分休ませなければならぬと思つたからでもあつた。

けれども、フオードが、これ位の事で、好きな仕事をやめる筈がない。彼は九時になると一反自分の部屋に退くが、父が眠つたと思ふ時分に、ソツと家から脱け出し厩舎に這入つて、馬に鞍を着け飛び乗つて走り出した。そして時には數哩もある所まで時計修繕に出掛け、朝の三時頃迄家に歸らないことさへ決して珍らしくはなかつた。

此の當時に於ける彼の時計熱は、ヘンリー自身でなければ、誰だつて到底知ることには出来ないほど熱烈なものだつた。その一例を述べてみよう。

或る夜彼は、いつもの様に父の良馬に跨つて、數哩もある遠方まで時計修繕に出掛けた。例によつて父は悴の外出を知らずに眠つてゐた。そしてヘンリーの仕事は、夜中から明方まで續いた。季節は丁度春の半頃であつたので、何處の川も皆満々と水を湛へてゐた。不運な事には、フオード少年が時計修繕をしてゐる間に、俄かに大雨が降り出した。そして来る時には、彼が馬上安全に乗り越へた小さい橋が、真夜中頃俄かの出水に溢れて、ヘンリーが歸る頃にはもう其の橋はなかつた。

滔々と渦を巻いて奔流する川邊に立つた時、フオード少年の顔には、「困つたな。どうして此の川を渡つたものであらう？」といふ困惑の色がみへた。けれども後年の勇者は、矢張當時の勇者であつ

た。少年は確く決心し、猛然として馬を逆巻く激流の中に、ザンブとばかり追ひ込んだ。

ヘンリーと良馬とは、其の時溺れて死なない迄も、少くとも足を折るか、手を挫くか位の危険を冒した。けれども天は勇者に幸運を恵んだ。ヘンリーも、そして彼の良馬も、唯濡鼠になつただけで別段怪我もせず家に歸ることが出来た。

ヘンリー、フオード少年の此の逸話は、今猶彼の昔語として多くの人々に傳へられてゐる。フオードは、それ程時計の修繕に熱中したのであつた。

丁度、その時分、鐵道の標準時間がとりきめられた。けれども一般には今迄用ひられて来た太陽の時刻が、多く重寶がられたのであつた。そこで此の二つの異つた時間が同時に用ひられたので、人々は非常に迷惑した。フオードは、だうかして此の不便から多くの人々を救はうと考へ、寢食を忘れて發明に耽つ

た。世の中に熱心位おそろしいものはない。僅か十三歳の子供であるフオードが、到頭二個の指針をもつて、同時に兩方の時間を指し示す仕掛の時計を發明した。長い間、不便だ〜と大勢の人々はこぼしてゐたが、大人ですらそれを工夫するものはなかつたのに、僅か十三歳のフオード少年が、それを發明したのであるから、其の評判は實にすばらしいものであつた。

「たしかにあの子は、機械の天才だ！」

と持て囃された。そして其の時計は、全く珍らしいものとして非常に重寶がられた。近村の誰も彼も、フオードに其の重寶な時計を拵へてくれと頼むのであつた。

熱心ほど、其の力の偉大なものはない。世界にはまだ曾つて熱心者の進路を塞ぎとめたものあつたのを一度だつて耳にすることがない。熱心は常に人の力を數倍にし其の才能を最も高いところまで持ち運んでゆくものである。それ

はヘンリー、フオード少年の機械に對する熱心がます〜、其の天才を發揮したことによつて最も雄辯に裏書されて居る。つまり天才とは、能く苦痛に堪へて、自己の最も優れた才能を發揮する者を云ふのである。天才は、その品質、趣向こそ異なれ、普く各人に平等に與へられた天授の才能であるから、之を發揮するも發揮せざるも、皆各人の心掛と努力一つである。

だから天才にならうと思ふものは、自分が天から授けられた最も優れた才能が、まづ何であるかを確乎と見極めて、其の才能を出来るだけ磨き、更に其の磨いた天授の才能をどうしたならば、最も容易に發揮することが出来るかと十分に考へて、

「これが最も自分に適した職業だ。此の仕事をするれば、自分の才能を十分に發揮することが出来る。だからきつと成功する。世の中のためになる。」
 といふ確い決心を獲たならば、倦まず弛まず側目をふらず一心不亂に其の

目的に向つて、遮二無二進んで行けば必ず天才を發揮し、成功は期して得られるものである。

世に天才と呼ばれる者も、決して始めから天才ではない。自分の天授の才能を養ひ、自分に最も適した仕事を怠らず熱心に努め、其志を成し遂げてこそ始めて得られる榮冠である。だから、どんなに世の中の人々から、天才だとい時は持て囃されようとも、遂に懶けて終へば今日の天才も明日は愚人とならなければならぬ。それと同時に他人の成功を見て、直に其の儘之を真似る様なことがあつてはならない。飽迄も自分の最も適した職業を選び、千辛萬苦と闘ひ、自己の天授の才能を發揮して、大なる成功を此の世の中に築き上げることが何よりも肝要である。これが何人をも成功に導く信條であり、秘訣である。されば、少青年諸君よ、自己天授の才能を自ら發見して、自ら磨き自ら發揮するならば、其の名を萬世に傳へ、人として此の世に生れた本懐を十分達する事は、最も容易なる事である。

四 最も適した職業を選べ

——ヘンリー、フオードの丁稚奉公——

ヘンリー、フオードが、父の農園で暮してゐた少年時代は、實に忙しい生涯であつた。冬は學校に通ひ、夏は學校から歸つて來ると農園に働き、そして夜は又彼の小さい仕事場で楽しい夢の實現に時を過すのであつた。

ヘンリーの父は、飽迄も彼を農場の主にしようと思つてゐた。だからヘンリーは、天性とも言ひたい程百姓仕事が大嫌だつたけれども、常に能く父の命令を守つて、太陽が西の山に沈み、鋤や鍬をもつ手先が見えなくなる迄一生懸命に父の手傳をした。けれども學校にゐる時も、農園に働いてゐる時も、彼の頭惱を絶へず支配してゐたものは、機械であつた。でヘンリーは、學校の復習や百姓仕事に濟むと、毎晩裏の納屋の中にある自分の小さい仕事場で、機械弄に熱中しては、最も楽しい時間を暮すのを殆んど習慣の様にしてゐた。すると何

時も、父は非常に不機嫌な顔をして、

「ヘンリー！。又お前はそんなことをしてゐるのか、百姓の子供が、機械なんか、弄り廻して何の役に立つと思つてゐる。」

お前は、一體、何になるつもりなんだ！。早く寝るがいゝ。」

と言ふのであつた。ヘンリーは、不安と不快とに満たされながら、不機嫌な父の顔を見上げて、

「はい。もう少しで……すぐ寝ますから……。」

と怒みを請ふ様に言つたけれども、父は、ヘンリーが學校から歸つて來ると終日農場で一生懸命に働くので、體も疲れてゐるのだから、ゆつくり休息させなければならぬと思ふ親心からも、自分の大嫌な機械弄に、その時間を費すことを好まなかつた。けれどもヘンリーの機械好きな心は、彼を一分間でも長く仕事場に留めておかうとするので益々父の不機嫌を募らせて行つた。

實際ヘンリーの父は、質朴で善良な村人であつたから機械工業といへば、純朴な田舎の青年を、都會に誘惑するものだとのみ思ひ込んでゐた。だからヘンリーが、百姓の仕事を嫌つて機械に熱中するのも、つまり其の魔力が誘惑した結果だと考へてゐたのである。

それにも拘らずヘンリーは、裏の納屋に、彼の小さい仕事場を拵へたのであつたが、其處には鍛鐵場もあれば、弓の弦で發動させる仕懸の旋盤や、萬力や、又何でも修繕に必要な道具が、備へ付けてあつた。そしてその一つだつて、買ひ入れたものや他人の手で拵へたものはなかつた。どれもこれも皆ヘンリー自身の手から絞り出して工夫したものばかりだつた。此の小さい仕事場こそ、彼が其の少年時代を何處よりも愉快に暮させた場所であつたと同時に、親子の間の不愉快も亦此處から産み出されたのであつた。

殊にその戀しい母が、彼の十三歳の時、此の世から去つて終つてからといふ

ものは、天國の様に楽しかつた其の家庭には、とかく以前の様な暖味がなくなり、ヘンリーの心の裡には、常に悲しみと寂しさが、犇々と攻めよせて来た。そこで彼は自然その遺瀨ない心を一層好きな機械の上に轉じては慰めて居た。かうして彼が機械に熱中すればするほど、ますます父の不機嫌は募るばかりで、親子の間には絶へず不愉快な日が繰返へされてゐた事は言ふ迄もない。そして其の啞合は、日ごとにも段々深まつて行くばかりであつた。

此等の出来事が、益々ヘンリーの心を機械の上に熱中させると同時に、

「僕が、天から授つた職業、自分が一生を捧げてやるべき仕事は機械だ！」

機械なんだ！」

といふ強い觀念を、其頃彼は既に確乎と心の奥殿に植え付けたのであつた。それからといふもの、フォードの都を慕ふ心は、日ごとにも増長して、如何なるものも之を防ぎとめることが出来ない程に高潮して行つた。そして彼は十

六歳になつた或る一日、遂に確い決心をして、誰にも一言の袂別も告げずに、家を飛び出し九哩もある道を歩いて、機械の都デトロイト市に出た。かくて親子の間に絶間のなかつた不愉快な啞合も遂に終を告げて、彼の家庭には非常な静けさが訪れたのであつた。

フォードは、長い間憧れてゐたデトロイト市に着いたので、彼の悦は非常なものであつたが、生れて始めて見た雑踏の街は十六歳の少年である彼の眼を驚かすと同時に、又非常に當惑させた。大抵の少年ならば、國を出る時は、目的を遂げなければ、決して再び故郷の地を踏むまいと、確い決心をして出て來ても、泊る宿もなく、頼る人もなく、だうしていか途方に昏れる様なことに出會うと、其の中八九人迄は、折々確めた決心迄も翻しがちであるが、ヘンリー、フォードの鐵の様に堅い決心は、そんなことで決して變るものではなかつた。彼は疲れきつた足を街から街へと運んで、やつとの思ひで自分の身

を置く下宿屋を見付けた。けれどもヘンリー少年は、泊つた其の晩から、間代と食費とを下宿屋に支拂はなければならなかつた。そこで彼は、疲れた體を休める暇もなく、翌朝まだ星があちこち空に輝いてゐる時分から起き出して市街へ出た。立派な一人前の人間でさへ田舎から始めて出て来て、誰も頼らずに職を求めるのは、決して容易のことではないのに、まして僅か十六歳の少年が、これといふ目標もなく街から街と經廻つて、自分で自分の勤め口を探すのであるから、その困難は一通りでないことが想像される。けれども彼は一生懸命になつて、それからそれへと機械工場を訪ねて丁稚奉公の口を求めたのであつた。

「ごうでせう。御主人！。そんな理由なんですから、使つてくれませんか？。」「そりや、それほど機械好なら使つてやらないこともないが、何にしる受人がなくちやア困るからなア。」

「けれども、御主人！。私は本人が何より確な受人だと思ひますよ。だから本人さへ確乎して居れば、受人なんかあつてもなくツてもいゝ譯ぢやアありませんか？。」

「なるほど、小僧！。なか／＼味なことを言ふな。さうだ。確にその通りだ。」

「さうか。さういふ心持なら受人がなくともいゝ。使つてやらう。」

「さうですか、使つてくれますか、ではいつから來ませうか？」

「さうだなア。明日からでも來るがいゝ。八時だぞ。時間に遅れるなよ！。」
ヘンリー少年は、かうして未だ一度も會つたことさへない工場主を説き伏せて、機械工場に丁稚奉公をすることが、出來たのであつた。彼は長い間寝る間も忘れたことのない、宿望を達したのであるから天にも昇る様な心持になつて悦んだことは言ふ迄もないが、それから後は毎日朝早くから此の工場へ出勤して、時間過迄も一生懸命に働いたので、工場主フラーワ兄弟からも非常に信用

された。

ヘンリーは、此工場で一週間二弗五十仙の給金を貰ふ約束であつたが、彼が下宿屋に支拂はなければならぬ間代と食費は、一週に三弗五十仙であつた。だからどうしてもその不足分だけを何とかして、何處かで補ふ様にしなければならなかつた。十六歳の少年にとつて、それは決して容易な事ではなかつたけれども、ヘンリー、フオードの財政手腕は、早くも既に此時から芽萌えて居た。それから後、或日の夕方、彼はペーカ街と第二十街との角にある小さい時計屋の店に、姿を現はした。

「御主人！。大體さういふわけなんです。」

「それはよく解つたがね、而し如何に田舎で時計修繕をしたことがあると君が言つてもだ、子供の君にそれが出来るとは、誰にしたところで、一寸と信用出来んからね。」

時計屋の主人マックギルは、ヘンリー少年の話をすつかり聞いて了つてからも猶かういふのであつた。僅か十六歳の少年がどう考へてみた所で、完全に時計の修繕が出来るとは思へないので、主人が訝つたのも決して無理ではない。「その心配なら要りませんよ。御主人！」

それなら、今御主人が、修繕しかけてゐるその時計を、私に修繕させてみて下さい。それが一番早手廻しですから……。

「さア……。」

とマックギルは躊躇しないわけにはゆかなかつた。なせなればもし取り返しのつかぬ程滅茶々に壊される様なことでもあつてはと考へたからであつた。けれどもヘンリー少年の熱心は、遂に訝つてゐる主人を到頭説き伏せて了つた。そして彼は分解してあつた懐中時計を組み立て、完全な修繕を加へてみせた。主人は少年が仕事をして居る間、殆んど身動きもしないで、チーツと其の

仕事振をみてゐたが、それが出来る上ると、

「なるほど、立派な技倆だ！」

彼は如何にも感に堪へないといふ様に言つた。

「なにも讃められる程のことはありません。唯修繕位は、どうにか出来るといふだけです。」

「いや、どうして〜實に美事なものだ。一體、何處で教はつたのかね？」

「別に、何處でも習ひません。一人稽古なんです。」

「ふーん。そりや益々見上げたものだ。大抵の人間は、何ヶ年といふ年期を入れるんだが、それでさへ、性質の悪いものになると、却々一人前にはなれないのに……。」

主人は熟々驚嘆して、曾つて村の人々が讃めた様に、彼を機械の天才だと讃

めた、へるのであつた。

到底最初の間は、雇つてくれさうにも見へなかつた此の時計屋の主人も今は全く反對に是非來て仕事を手傳つて貰ひたいと、却て彼の方からヘンリーに頼むのであつた。ヘンリー少年に限らず誰にしたところで、相當に自信がある迄技倆を磨いておきさへすれば、何處へ行つても、何人からも相當の尊敬は拂はれるものである。ヘンリーは、この店で毎晩四時間づゝ働いて、一週に二弗の賃銀を貰ふことを約束した。そこで始めて彼は下宿屋に拂つても猶一弗だけ餘分の金を有つことが出来たのであつた。

それから後といふものは、フラワー兄弟の機械工場で朝早くから、夕方まで十時間も働いて、その上毎晩七時から十一時迄マツギルの店で時計修繕をした。だから大抵普通の少年であれば、こんな生活は、犬にも等しい生活だと考へたであらうし、又誰もさう迄しないであらうが、飽迄も自分の目的を貫く

ここに一生懸命であるヘンリー少年は、此の犬の様な生活も、何とも思はないばかりでなく、彼は却て自分の思ひ通り理想が叶つたことを悦んだのであつた。後に偉くならうとする者は、常に普通の考をもつて進んで行つたのでは、決して其の目的を達することは出来ない。それと同時に、自分の天分にびつたりと合つた好きな仕事であるならば、他人が想像するほごそんなに苦痛なものでも、骨の折れるものでもない。興味の中に仕事をドシ／＼片付けてゆける。だから益々面白くもなれば、上達もするのである。

ヘンリー、フオードは、機械の事が覺へたい／＼と夢にも忘れなかつたが、かうして毎日二つの仕事場で楽しい時間を過すことが出来たのであるから。彼は自分のこの生活に、非常な興味と幸福とを感じたのであつた。そして彼は、一週間毎に、二ヶ所の主人から給金を貰ふことが出来たけれども、彼にとつては元より給金が、第一の目的ではなかつた。もし假に誰かゞ彼

に生活さしてくれたならば、ヘンリーは一仙の金がなくても、例へ無給金でも悦んで働いたであらう。

ヘンリー、フオードの望んでやまなかつたものは、言ふ迄もなく給金ではなかつた。彼の望んでゐたものは、唯機械に就ての知識と経験とであつた。機械工場と時計店とは此の望を十分に満足させた。そればかりではない、彼は出来るだけ多くを知らうとして、常に仕事を楽しんでする様な機械職工や、技術の優れた職工とは、自ら進んで話をするのを樂しみにしてゐた。さういふ風であつたから、一日は一時間の如く、一時間は一分間の如く愉快に過ぎ去つて行つた。彼の知識と技術とはメキ／＼と上達した。だからヘンリーは少しだつて仕事に飽きたといふ例がなく、毎朝誰れよりも早く仕事に取り掛り、夜も遅く迄熱心に仕事をして、何日でも時の經つのを知らずに興味の中に樂しく暮して行つた。實際ヘンリーにとつては、仕事は義務といふよりは、樂しい遊

四、最も適した職業を選べ

戯であつたのだ。

西洋の名高い哲學者が、「義務の快樂化」といふことを唱へてゐるが、ヘンリー、フォードは、少年の時からそれを能く實行してゐたのであつた。だから彼は、フラワー兄弟の機械工場に九ヶ月間働いてゐる内は、此の工場で覺へられるだけのことは、何もかも皆覺えて了つたそこで彼は何か新しいことを習ひたいものだと考へる様になつた。その時に、ヘンリーは此の工場から一週間に三弗の賃銀を貰つてゐた。それにも拘らずヘンリーは、フラワー工場よりも一週に五十仙低い給金でドライドラック、エンジン製作場に勤める事に決めて了つたのであつた。

此の出來事から考へても、彼は決して給金の爲めに働く人間ではなかつたことが能く解るのである。その生涯を通じて何日でも、轉職した場合は、誰もする様に賃銀から賃銀を追つてゆく様なことは決してしなかつた。何時でも

仕事から仕事をたづねて移つて行つた。つまりヘンリーは下宿料を拂へさへすれば、それで十分であつた。ますます知識と經驗とを積んで、自分の天から授つたと考へてゐる才能が磨けて行きさへすれば、それで満足だつた。彼は生活のために生活をせず、常に大きな目的に向つて、人生の旅を旅して行つたのであつた。

五十九歳の模範技師

——不動のエンジンとヘンリー、フォード——

ヘンリー、フォードは、知識と経験を遂つて、フラワー兄弟機械工場からドライドック、エンジン製作場へ転職した。それがために彼は、一週間に五十仙づゝの損をしたけれども、元よりそんな事は何とも思はなかつたばかりでなく、却てドライドック、エンジン製作場へ来たゝめに、新しい仕事から新しい知識が得られるのを非常に悦んで、毎朝早くから出勤して時間過迄熱心に働き、夜は又マツクギルの店へ行つて時計修繕をするのであつた。

實際ヘンリー、フォードは、機械ならばどんな機械でも好きだつた。といふよりは寧ろヘンリーと機械との間には誰だつて、恐らく説明することの出来なほご不思議な力が活いてゐたと言つた方が適當であらう！。だからどんなに新しい機械でも仕事でも決して困らなかつた。その熱心は直ぐ新しい機械

に馴染んだ。

やがてヘンリーは、どんな機械よりもエンジンが一番好きになつた。彼がエンジンの傍に立つてゐる時は、あの狂暴な響を立て、全速力で廻轉して居るエンジンも、彼の呼吸一つで、直ぐにも止めることが自由に出来る様に見へた。それほどエンジンと彼との間には、不思議な魔力、不思議な因縁が結ばれてゐたのだつた。

此の廣い世の中にも、熱心者の前を遮るものは一つもない、とは昔から多くの人々が能く口にするところであるが、實際ヘンリー、フォードの狂人の様な熱心は、機械に對する彼の知識と經驗とを益々増長させ、其の技倆はメキ／＼上達して、遂に會社内では、誰一人としてヘンリー、フォードの名と其の優れた技倆を知らないものはなくなつた。彼は、何でも出来る多能の技師として、大勢の仲間から非常に尊敬される様になつたのであつた。

此のドライブドック、エンジン製作場の支配人はアレキサンダー、ダウといふ男であつたが、ヘンリー、フォードの立派な人格とその優れた技倆とは、遂に二人を水も漏さぬ程仲の良い友達に結び付けて終つた。そして何日もダウ支配人は、自分の會社の誇として、誰に向つてもヘンリー、フォードを讃めた、へるのであつた。

丁度その時分、デトロイド市にフレデリック、エフ、イングラムといふ製造家が住んで居た。或る時、彼は、自分の工場内に新しいエンジンを据へ付けた。言ふ迄もないイングラム工場の技師達が、その据付工事をしたのであつたが、どうしたものか、其のエンジンは、大勢の技師達がそんなに工夫してみても如何に、苦心しても、一向に動かなかつた。そこでイングラムは、途方にくれて了つた。

「一體どうしたのかね？」

「何とか動かす手段はないものだらうか？」

「御主人！。出来るだけのことは、何もかもやつてみたのですが、どうやつてみても駄目なんです。」

「そりや、實に弱つたな。とにかく、今一應研究してみてくれないか。その上で又一分別することにするから……」

「とても、私達の手にはおへないとは思ひますが、それならば、今一應やつてみませう。」

それから後、技師達は手を代へ品を換へ色々工夫して、大騒をやつたけれども、矢張エンジンは地から生へた巖の様に身搖ぎもしなかつた。

イングラムは、ホト／＼業をやして了つて、名の知れた技師は大低招いた。機械の動力にかなり多くの代價を拂つたけれども、何日迄たつても動力を得る

見込がなかつた。そこで彼は、もはや、このエンジンを諦めて他の種類のものと取り代へるより外に道がないと思つた。けれども据付からそれ迄には、随分澤山の費用をかけたのであるから、出来ることならばと思ひ煩つて居た。丁度その時イングラムは、曾つて友達から聞いた話を、ふと思ひ浮べたのであつた。

「さうだ。友達に電話をかけよう！」

と彼は獨言の様に言ふと、直ぐ電話室に其の姿を消したのであつた。言ふ迄もなくイングラムは、

「不動のエンジンを動かすことが出来るかどうか、試めさしてみたいから、其の技師をよこしてくれ」と頼み込んだのであつた。

すると、暫く経つてから、一人の瘠形で、筋骨の逞しい青年がやつて來た。待ちかねてゐたイングラムは、そこで丁寧に挨拶してから、

「貴郎に見て頂きたい不動のエンジンといふのは、あれなんです。」
「さうですか。」

其の青年は、誠に口数が少なかつた。必要のことより外にはあまり多くを言はない男であつたが、決して人好きのせぬ種類の人間ではなく、竹を割つた様に氣持のよい青年であつた。やがて青年は、不動のエンジンとして此の工場の人々が持て餘してゐる、エンジンの傍に近づいて行つた。彼は二三分間其の前に立つて、何もせずにジーツとエンジンを見詰めてゐたが、やがて少しばかりいぢると、直ぐ絞弁の處に進み寄つて、それから蒸汽をかけた。

ところが不思議なことには、今迄鶉の毛程も動かなかつた、不動のエンジンは忽ち狂暴な呻を生じて、劇しく廻轉し始めた、工場の多くの人々は勿論居並ぶ技師達も目を圓くして驚いたが、殊にイングラムは、殆んど氣も狂はんばかりに喜んだのであつた。

「貴郎は、一體何をしたのですか？」

「いや、別段何もしません。」

と青年は答へた。

イングラムは、あらゆる手段を、工場の技師達に盡させ、その上長い時間とかなり多くの金を費したけれども、なか／＼動きさうにもなかつた不動のエンジンが、たつた四五分間で、而も呻りを立て、立派に動き出したのであるから一體どうしたのかと思つて、青年にかういふ奇問を發したのであつた。

青年技師は、これ程優れた技術をもつてゐたけれども、少しも傲らなかつたので、工場主は勿論技師達迄もすつかり感心して終つた。そこでイングラムは僅か四五分間の青年技師の其の勞務に對して、十弗といふ高い報酬を支拂つたのであつた。

此の青年技師こそ、誰あらう？。實に本編の主人公ヘンリー、フオードであ

つたのだ。

イングラムは、曾つて友達であるエンジン會社の支配人、アレキサンダー、ダヴから、

「僕の會社には人格といひ、技術といひ、實に立派な青年技師がある。彼は、何でも出来るが、又どんな事でも必ずやつてのけるといふ氣性の男だ。

年は若い、實に多能の男だ。まづ千人に一人だらう！」

と自慢話をしたことを、思ひ浮べたので、ダヴ支配人を通うして、青年技師ヘンリー、フオードを頼んだのであつた。

かくてヘンリーの名が、ます／＼社の内外に知れ渡つて來た頃には、彼が此の工場に這入つてから、もう二ヶ年の月日が経つてゐた。そしてその時迄には此の製作場でやることは何もかも皆呑込んで了つて、ダヴ支配人が言つた様に、何でも出来る男になつて居た。だから彼の知識慾は、又何處か他に適當な所を

求める様になつた。此の時彼は、漸く十九歳の青年であつたのだ。

ヘンリー、フオードは、既にこの時には色々の技術を覺へ込んでゐたのだから、もし彼が蒸気や、ガソリンのエンジンを製造する仕事で、一生を送らうと思へば、何時でも、何處の工場でも、彼に優れた地位と、相當な給料を與へたのであるが、彼は、蒸気機關を取り付いたり、其の修繕をしたり又運轉したりする事で、他人に教へる經驗を得たいと考へて、其の勤め口を探して居た。

丁度其の時分、ニウヨーク洲のスケネクタデー市にあるウエスチングハウス社で、十馬力から二十馬力の小形な移動式エンジンを製造して居たが、その移動式エンジンを販賣するために、デトロイド市に、代理店を經營してゐる、ジョン、チャーニーといふ男があつた。

或る日のこと、ヘンリー、フオードは、此の代理店でチャーニーから「巡廻教師」といふ、彼の希望には極めて好都合な地位が與へられた。そこでフオード

の引受けた仕事といふのは、此の小型の移動式エンジンを農場用として取り付けたり、發動させたり、又はそれを操縦する方法を百姓に、教へるのが役目であつた。それから又修繕する必要のあるエンジンがあれば、農家から頼まれて、それを修繕してやることも亦仕事の一つであつた。

何時でも、何事にも熱心であるフオードは、その役目を果すのにも非常に忠實に働いた。

「技師さん！。あのエンヂンを一寸とみて頂きたいのですが、だうも此の間から具合がわるくつて弱つてゐるんです。」

「さうですか。見てあげませう。隣家のエンヂンを据へ付けて、すぐ來ますから……。」

「では、濟みませんが、是非一つ御願ひいたします。」
フオードは、かうして、彼處此處の農村を、隣から隣へと巡廻技師をして

歩いた。

此等の仕事は、ヘンリー、フオードが、其の時分迄に覺へて居た熟練の程度に、最も適當した仕事だつた。

ヘンリーはその天性から何時でも仕事が多いのを悦んだが、此の新らしい職務は、望み通り澤山の仕事を彼に與へたので、フオードは朝は日の出と、もに起き出して仕事に出かけ、夜は遅くなつて家へ歸つて來た。だから勿論チーニーからは大變に信用されたが、到る處の農家の人々からも、親切な技師として非常に尊敬されたのであつた。

ヘンリー、フオードの巡廻技師の職務は、彼が今迄何處の工場でも贏ち得た様に、非常な成功であつた。

自分の職務に、忠實でありさへすれば、誰でも必ず到る處で信用され尊敬されるばかりでなく、それ相當の成功は獲られるものである。

六 世界の農業に革命を與へたフォード

——機械農業を實行してゐるフォード農場——

ヘンリー、フォードの名は、恐らく此の後數世紀の間、北アメリカ合衆國を
通うして、世界の人々に必ず記憶されるであらう。

フォードが、社會に成し遂げたことで、世界に記録を作らないものは、恐ら
く一つとしてないであらう。それほどに彼の功業は偉大であるが、その中でも
最も後の世の人々から尊ばれるものは、一體何であらうか？。

出来るだけ立派な自動車を、出来るだけ安い値段で賣り弘めて、世の中に貢
献したゝめであらうか？。

世界の誰も容易に出来なかつた高い給金を支拂ひ、八時間労働を實行して、
労働問題に解決の鍵を與へたゝめであらうか？。

薄利多賣によつて億萬長者の富を贏ち獲、製造工業の組織に革命的の規範を

普く世界に示した、めであらうか？。

ナイヤガラに次ぐ一大水源地である、マツクル、シヨールズに水力を發す大計畫を立て、アメリカ政府に建築し、世界の人の耳目を聳動した、めであらうか？。

勿論それ等は、一つとしてヘンリー、フオードの名を、後の世迄も有名にしないものではないのであるが、それにもましてヘンリー、フオードの名と其の實とを、後の後迄も不朽に傳へて、世界に偉大なる救済の福音を齎したものは何といつても彼が農業に與へた革命ではなからうか？。

ふりかへつて、我が日本に於ける百姓の生活をみるに、彼等は相變らず殆んど二千年以前の通り、年百年中働き通しに働いてゐる。今日では、農民も、都會で發行する日刊新聞も讀めば、電車にも汽車にも自轉車にも自動車にも乗るラヂオも聞けば飛行機も見てゐる。

けれども百姓自身は、いつまでたつても、殆んど二千年の昔の様に、昔も今も矢張農場の奴隷である。朝は星を戴いて農場に出て行き、夜は月を踏んで家に歸へつて来る位に、年百年中、朝から晩まで働きづめに働いてゐる。殆んど彼等には休息の暇がない位である。そして妻子も全く其の通りに苦しみ通うしで働いて居る。それでゐながら小作人は常に生活に虐げられてゐるのだ。その昔自分で作つて自分で衣食してゐた所謂自給自足の時代よりも、現在はもつと不自由な悲惨な生活を續けてゐるのだ。此の悲惨な小作人の生活だけは、いくら世の中が進んでも、今だに虐げられた儘で、取り残されてゐる。なせ何時迄も虐げられ、なせ何時も取り残されるのであらうか？。

これに解決の鍵を與へ、それに救済の福音を齎したものが、ヘンリー、フオードの、農業に與へた革命である。彼は、人間の肩からその苦役とその重荷を取り除けて、それを金屬の上に乗せかへたのであつた。一年の中たつた二十餘

日の間働いただけで、立派に一年中の收穫が得られる道を實行して、世界の農民に對して自覺を促した。かくてフオードは、世界の誰も容易に成し遂げることの出来なかつた二千年來の問題に、大きな斧鉞を振つて根本から解決を與へた。

けれどもヘンリー、フオードが、此の偉大な使命を果す迄には、長い年月非常な苦心を拂つたことは言ふ迄もない、彼は十六歳の少年の時、百姓仕事に見きりをつけて、デトロイド市に向つて家出をし、機械工場の丁稚奉公に這入つてから、絶へず二千年來の謎である農業の不振を、悲惨な農民の生活を、根本から救はうとして、苦心に苦心をし續けたのであつた。

それだからこそ、フオードは、彼が自動車の發明で世界に成功を遂げてから後、親しい友達の一人であるエドガー、エー、グエストに對つて、「君も知つてゐる通り、百姓仕事は、一番難儀な奴隷的な苦役だよ。」

だから、僕は少年の時、我家の表門から跳び出して以來今日まで、何時でも農場のことを考へる時には、其の苦役を軽くしたいと願つて來た。つまり人間の肩から此の重荷を取除けて、それを金屬の上に乗せるといふことが、僕が常に懷いてゐた夢だつたのだ。

そして若しそれを僕が成し遂げたならば、僕は世界の人々に對して本當に一つの奉仕をしたもので、これこそ母が、常に僕にさせようとして教へてくれた奉仕の本務なんだ。

と語つたが、フオードは、後にそれを自分の廣大な農園で實行してゐるのである。

ヘンリー、フオードが、何時でも百姓のことを話す時は、百姓の生活に十二分の理解をもつて居るのである。言ひかへれば、彼は農園内に産聲をあげた。だから其の少年の頃には父の農場で、毎日太陽が西の山に沈む黄昏時まで、疲れ

きつた足を牽きづりながら、幾哩もなく、土地を鋤き起すために、父とも
 に働いてゐた。そこで彼は百姓仕事の酷いこと、奴隷の様に悲惨なことを能く
 知りぬいてゐたのである。それであればこそ、フォードは、自分自らも言つて
 居る様に、百姓仕事を一番難儀な、奴隷的な苦役だと考へ、そして我家の表門
 から跳び出して機械工場に丁稚奉公に這入つてからも、絶えずだうかして此の
 苦しみから多くの百姓を救ひ出さう、人間の肩から此の重荷を取り除けて、そ
 れを金屬の上に乗せようと思つたのであつた。

殊に彼が、巡廻技師になつて、彼處此處の農村を訪れ、再び百姓の生活を
 眼の當りみる様になつてからは、一層その奉仕の本務を成し遂げようと思つた
 たのであつた。

けれども此の頃、百姓の誰も、決して農場機關車が欲しいなご、フォード
 に對つて話した者は、まだ一人だつてあつた譯ではないが、フォードは馬の力

をかりて百姓仕事をしてゐる間は、どんなに腕いても、彼等は奴隷の様な生活
 から開放される日は來ないと、熟考へたのであつた。しかも夏の僅かな時間
 を働かせるために、長い冬の間馬を養つておかなければならない、その不經濟
 なことや、又馬が地面を鋤き起す力は、決して強いものでないことなどを考へ
 るとどうしても自動機關車を發明して、多くの農民を奴隷の様な生活から救は
 なければならぬと思つたのである。

丁度其の時、彼はやつと二十歳の青年であつたが、巡廻技師の閑暇な冬の
 間を、テイヤポーンの住みなれた裏の納屋の中にある、自分の小さい仕事場に
 歸つて、非常に良く土地を鋤き起して、働いて居る時の外には決して食物を食
 べない、經濟で實用向の機械を發明しよう、一生懸命に骨を折つたのだ。
 フォードが、發明しようとした機械は、今の様にトラクターといふ名で呼ば
 ずに、最初は農場汽關車(ファーム、ロコモーター)と名づけるつもりだつた。

「お父さん！」

「なにか用か？。ヘンリー！」

「あの裏の納屋に、長い間藏ひ込んである古い草刈機械を、私に頂きたいのですが……」

「ありや、もう用途がないんだから、やつてもいいが、一體だうするつもりなんだ。」

「一寸と、思ひ當つたことがあるので、ぜひ頂きたいと思ふんです。」

「又機械弄か、一體どんな機械を造るつもりなんだ。」

と言つた父の顔には、又何時もの不機嫌な色がたゞよつてゐた。

「農場機關車を拵へてみようと思ふんです。」

「さうか、そりや、何時にもない善い思付だ。それが果して發明出來れば、皆なが大助りだが、しかし、却々困難な仕事だ。」

常にフオードの機械弄に不機嫌を増すのを常とする父も、此時ばかりはヘンリー、フオードが、大勢の百姓のために、農場機關車を發明すると聞いて、何時になく彼の仕事に興味を感じ、心快く草刈機械を彼に與へた。けれども此の草刈機械は、既に使へるだけ使ひ果したものであつたから、機械の一部である鑄鐵製の大きい車輪を取り外して、應用することが出來たゞけで、其の外には別段これといつて役に立つものはなかつた。

それから後も父は、いつも機嫌のいゝ顔を、息の仕事場にみせるのであつた。

「ヘンリー！。大分色々なものが出來たな。これは一體何かね？」

「これですか、これは汽笛といふものです。」

「それから、あれは何か？」

と言ふ様に、父には如何にも「馬なし車」の出來上る日が、待ち遠しさうにみ

へた。

「いつ頃出来るかね?」

「まだ大分かゝりますよ。」

「随分發明といふものは、面倒なものだな、俺は今度熟々その容易でないことを知つたよ。」

と父は言つたが、實際又それは容易なことではなかつた。何も機械に就て知識のない素人からは、かうした親子の會話も、別段深い注意を拂はれずに聞き流されて了ふであらうけれども、もし一度でも、その實際に出會つて鑄型を拵へたり、汽笛を鑄つたりしてみたならば、何もかも不完全で、何の準備もない邊鄙なこの片田舎の小さい仕事場で、僅か二十歳の青年フォードが、農場機關車を發明するために、どんなに多くの困難に出遭つたか、どんなに苦心したかを了解することが出来るであらう!。實際此の時のフォードの苦心と困難とは

到底言葉では盡されないものがあつた。

言ひ盡されない苦心や困難と闘つて、やつとフォードが拵へあげたものは、唯一個の汽笛を備へ、其の口径が三インチ、衝程は三インチ四分の三で、蒸気は眞直に立つた多くの管のある汽罐から與へられるもので、其の燃料は薪であつた。

ヘンリー、フォードは、目的通り立派に農場機關車を造り上げることが出来たのであるから、彼は狂せんばかりに悦んだ。父もともく、非常に悦んだのであつた。

「此のエンジンならば、僅かの時間で、父の農場を全部を鋤き起すことが出来るだらう!」

とフォードは考へたのである。

けれども、それは試運轉をしてみると、僅に四十呎走つただけで、バッテリー

と停つて了つた。其の原因は、蒸気が不足だつたからである。もつと委しく言へば、続け様に蒸気を發すことが出来なかつたからであつた。

かくて、フォードの長い間の苦心も全く水の泡になつて終つた。そこで彼は自分の造つた「馬なし車」が爆音凄まじく、父の農場を走り廻る理想の夢からも、全く目醒めなければならぬ事實に出遭つたのであつた。けれども決して落膽も悲觀もしなかつた。フォードは、却て「馬なし車」が、僅か四十呎だけでも走ることの出来た成功を悦んだのである。

もし、フォードが、意志の薄弱な青年であつたならば、或は落膽のあまり機械に對する興味を失ひ、その發明を斷念したであらう！。そして世界の立志傳中の何のページを披いてみても、ヘンリー、フォードの名を見出すことは出来なかつたに違ひない。

その一生を通うして、フォードは、一度だつて落膽した事も悲觀したことも

なかつた。それだからこそ、彼は幾度も機械の發明に失敗したけれども、到頭最後の成功を獲る迄奮闘したのである。

今、ヘンリー、フォードの農場へ行つたならば、その廣大な九千エーカー（我が國の約三千七百七十二町歩に當る）の中の五千エーカー（約二千四十町歩）だけが、綺麗に耕されて居るのを見るであらう！。それは言ふ迄もなく彼の發明した自動機關車が、その時期々に働いた結果に外ならないのである。其處には、その昔、彼の父が、幾度もなく馬を使つて鋤き起した二百四十エーカー（約九十八町歩）の農園も含んでゐる。そして道路から遙に深く入り込んだところに、大きな石造の家屋が建つてゐる。それはヘンリー、フォードが現在住んでゐる住居であるが、彼は此の大農場の管理を、百姓のことについては何も知らない、若くて元氣のよい技師に委せてゐる。

「誰だつて、二三日の間には、機械農業位は、呑み込むことが出来るものだ。」

どフォードは言つてゐるが、實際も亦全くその通りで彼は千九百二十一年の夏に、收穫をする小麦三千エーカー（約一千二百二十四町歩）を、フォード工場から呼び集めた職工と無数のトラクターと、刈禾機を運轉させて、僅か四日間に全部の收穫を済ましてしまつた。又千九百廿一年の秋には、小麦の蒔付面積二千五百エーカー（約一千二十町歩）の鋤起を、これも僅か五日半で完全に済した。そればかりではない。フォードの農場では、百姓が一年の内十一ヶ月間かゝらなければ出来ないと思へてゐる仕事を、僅か二十一日間で全部すまして終ふのである。

かくてヘンリー、フォードは、遂に人間の肩からその重荷を取り除けて、それを金屬の上に乗せることに成功したのである。一番難儀で奴隷的な苦役を百姓から開放したのであつた。

機械を以て、こんなに早く、こんなに容易に出来るヘンリー、フォードの新

らしい理想は、現在デトロイド市の近くにある彼の農場で、立派に實行されてゐる。確に二千年このかた、世界の誰も到頭成し遂げなかつた経済的で、實用向の機械農業を、唯フォード一人だけが完全に成し遂げ得たのである。

ヘンリー、フォードが、世界になげた此農業上の革命、即ち百姓仕事の苦役から、人間を開放した無駄のない機械農業が、世界の到る處に實行され、多くの農民が、フォードの所謂一番難儀な奴隷的な苦役から、全く救はれる時が来たならば、その時こそフォードの名と實とは、益々光を世界に放つことであらう！

我が日本の小作問題も、そして二千年このかた、餘り變化のない百姓生活も悲惨な小作人の生活も、ヘンリー、フォードの世界に與へた此の農業上の革命的使命を十分に研究して、之を適當に採り容れることが出来たならば、必ず救はれることであらう！。それにはまづ何よりも先に、農民自身が自覺しなければならぬ。

我が日本の少青年諸君！。殊に農村にある少青年諸君よ、諸君は、ヘンリーフオードの諸種の事業を知つて、その人格に接するとともに、フオードが實行しつゝある農業上の改新の蹟をも尋ね、之を研究して太古から農本主義である、我が日本のために奮起しなければならぬ。

七 フオード、父の農園に歸る

——ヘンリー、フオードの結婚——

ヘンリー、フオードの「馬なし車」が、四十呎走つてから間もない或る日のこと、其の生涯に大きな變化を與へる様な、時機と出来事とが、彼の身の上に通つて來た。

もしもヘンリーが、意志の弱い青年であつたならば、恐らく彼は此時から自動車のことなど、ぶつたりと思ひきつて了つたであらう。

父は、ヘンリーが小學校に通つてゐた頃も、立派な一人前の技師になつてからも、農園に歸つて先祖代々の家業を繼ぐことを常に望んでゐた。家には相當な農場もあるのだから、百姓仕事に勢だしさへすれば、かなり裕福な百姓として呑氣に暮して行かれるものを、フオードが自分の好きからとは言へ、あの煤煙に汚れた世路辛い都の空で、職工生活を續けてゐることを考へると、父は子

を思ふ親心から其の馬鹿氣た考を悲じますにはゐられなかつたのだ。

ヘンリー、フオードが、農場機關車を拵へるために、冬の長い間父のもとで暮す様になつてから、父は一層その思を募らすのであつた。

或る日のこと、ヘンリー、フオードの父は、わが子を一室に呼び寄せ、何日になく改つた態度をして、

「ヘンリー！。俺は、今日お前に、折入つて相談があるんだが……。」

「お父さん！。改まつて相談とお仰るのは、一體どんなことなんですか？」

「實はな、俺も頑固なことは言つてゐる様なものゝ、取る年の加減で、此頃は
大分體も弱つて來た。そこで是非今度こそは、お前に家にて貰ひたいと思ふのだ。」

「そりやお仰るまでもなく、お父さんの御心持はよくわかつてゐます。」

「さうか解つてゐてくれさへすれば、何よりも結構な話だが。」

では、俺の言ふことを聞いて、家に居てくれるつもりなんだね。」

と父は、念をおすのであつた。ヘンリーは、子を思ふ親心から、自分を家に留めて置きたいばかりに、出来るだけの好意を表はすのに、苦心して居る父の心を察すると、その言葉に従はないわけには行かない氣もするのであつたが、併し自分の生命とも言ひたい程好きな機械までも振り捨て、大嫌な百姓仕事に勢だす氣にはどうしてもなれなかつた。

「お父さん！。私としましても、先祖代々の家業ではあり、又お祖父さんも、お父さんも一生懸命に私の身を思つて、今日迄家のために盡して下すつたことなどを考へますと、一も二もなく、お父さんの御意見に従はなければなりませんか……。」

折角こゝ迄漕ぎ付けたものを、今更捨て、了ふのは、實に残念ですから……。」

どヘンリーが、自分の心持を十分に話してから、父の了解を得ようとする。父は皆まで聞かずに、彼の言葉を遮つて、

「その理由なら聞かんでも、大概俺には能くわかつてる。

成程お前の言ふ所も尤もぢや。今ではお前も相當の技倆になつてゐるんだから、さう思ふのは決して無理もないことだが……

しかし、ヘンリー！。まア能く考へてもみるがい、何も機械を拵へるばかりが、世の中のためでもあるまいせ、俺の考では百姓をしてゐても、同じことぢやアなからうかと思ふがね。」

「そりや、如何にもお父さんのお仰る通りです。

けれども、これ迄も四時申しあげた様に、私には何よりも、機械を相手にするのが、一番適當してゐるのですから。」

「うん。それも、今となつては尤だと思ふが、何にしる、お前が長男で、相續

者なのだから、お前の都合ばかり考へて居たのでは、第一先祖へ對してもな
大にさうぢやらう、ヘンリー！」

と父は、今迄にない程折れて出たのであつた。けれども其の心の裡を酌めば
此際どうしてもヘンリーを、引き留めずにはおかない強い意志が、歴然と見へ
るのであつた。そしてもしもヘンリーが、どうあつても自分の意見を主張して
父の希望を退ける様なことがあつたとすれば、父を非常な憤怒から悲嘆へ導く
ことも、亦餘りに能くヘンリーには解り切つて居たので、彼は此の場合、例へ
一時にもせよ、父の希望を容れなければなるまいと考へたのであつた。

「それ程まで、お父さんがお仰るものを振り切つて、再び市へ出かけると言ふ
のも、實際本義でもありませんから、それでは兎に角家に留ることに致しま
せう。」

「さうか、さうしてくれるか。」

それで、俺もやつと一安心したよ！」

父は、如何にも嬉しうに見へた。望んでも到底得られないものが得られた様に、自分の希望が叶つたことを無上に喜んだのだつた。そこで父は、早速四十エーカーだけの土地を取り敢へずヘンリーのものとして興へたのであつた。かくてヘンリー、フオードが、田舎の農園に暮す様になつたと知つた時、彼の父は勿論、近所の人達も、ヘンリーが、益々生れながら好きであつた機械を全く振り棄て、先祖代々の百姓になり、永久に彼の農園に鋤鋤を取る様になつたのだと噂し合つたのであつた。

しかしヘンリーが、父から譲られた土地の大部分は、森林であつた。そこで彼は、色々考へた末、父に對つて、

「お父さん！、私は、あの森林の樹を伐り出さうと、思ひますが、ごんなものでせう？」

「そりや、いゝ考だ！。あの森を伐り出せば、大分収入もあらうし、又第一後を開懇すれば、立派な畑も出来る勘定だから至極結構なこつた。

かうした會話が、或る冬の日の午後、親子の間に交はされてから間もなく、ヘンリーの森は、盛んに樹が伐り倒された。樫でも、櫟でも、落葉樹も、常盤樹も、何もかも手當り次第に、ヘンリー、フオードの打ち揮ふ斧の前には、皆降伏して行つたのだ。

それから後、間もなく彼は、十二馬力のエンヂンを据へ付けて、製材の機械を動かした。彼が買ひ求めて來た圓形の器械鋸は、次から次へと製材して行つた。そして製材所から出て來る材木は、ドン／＼市場へ向つて賣拂はれて行くのであつた。

冬は過ぎて春が農場を訪れ、農夫が畑に出る様になると、ヘンリーは、びつ

たり製材を中止して了つた。けれどもヘンリー、フォードの農園には、春になつても一向に百姓仕事の始まる様子さへみへなかつた。

「ヘンリー！。お前はさうして仕事を始めないのか？」

「お父さん！。何日もいろく御心配をかけてすみませんが、まア暫くの間私のする様にさせておいて下さい。」

「そりや、十歳や十一の子供ぢやアないんだから、別段やかましく言ふ譯ではないが、農期に這入つても一向農場に手も付けんので、一體だうしたかど心配して聞く譯なんだ。」

父は、ヘンリーが、目を逐つて自分の豫想を裏切つて行く様に氣遣はれてななかつたので非常に心配して、彼に一日も早く百姓仕事をせよと促すのであつた。

けれどもヘンリーは、春が段々到る處の畑に深まつて行つても、依然百姓仕

事には手を出さなればかりでなく、父や村人達の豫想を全く裏切り、バックアイス收穫機會社に雇はれて、農用のエンジンの据付だの修理などをして、一生懸命に働いた。しかしヘンリーは、もとより父の了解を得なければならぬことを考へてゐたので、それから後幾度も熱心に父を説いたのであつた。父もヘンリーが、何日迄経つても鋤鍬を手にしさうにもないのを見極めたので、澁々ながらではあつたが、遂に我が子の願を容れたのであつた。

ヘンリーは、一時父の希望を容れて農園には歸つたけれども、矢張父の望んでゐる様な百姓の子供ではなかつた。彼は飽迄も其の生命を打ち込んで居る機械の世界に生きて行つた。何處迄も自分の確く信じてゐる目的を成し遂げなければ止めない意志の人間だつたのだ。

かうして彼が、父の農園に歸つて、その「馬なし車」を發明するため、殆んど狂人の様に狂暴な血を沸し、又恰も豪風が枝を吹き拂ふ様に、彼の森の材木を

伐り出したりしてゐる間に、はや三年の月日が経つて、彼は二十四歳の春を迎へたのであつた。

その年、ヘンリー、フォードは、グリーンフィールドに生れ、其處に人となつたクララ、ブライアント嬢と、芽出度結婚の式をあげたのである。時は西暦千八百八十七年（明治二十年）であつた。

此のブライアント嬢は、彼の生涯を通して、恰も影の形に随ふ如く、能くヘンリーを助け彼を慰め彼を勵まして、遂に其の目的を貫かせた賢婦人である。そこで彼は、新しい家庭のために、自分の森から材木を伐り出して来て、住み心地のよい家を新築しようと思つたが、やがて其の理想の家が出来上つたので、新夫婦は其處に移り、春の様に樂して家庭を作つた。それと同時に、小學生時代から無限の樂しみを彼に與へた「彼の小さい仕事場」も亦、此の新しい家の近くに引張つて來たのであつた。

ヘンリー、フォード夫婦の間に、唯一粒種の子實である忪エツル、ブライアント、フォードは、彼等が樂しい新婚の夢を結んでから、丁度七年目の千八百九十三年十一月六日（明治二十六年）に生れたのである。

八 光明は希望から

——ヘンリーフォードの最初の自動車——

ヘンリー、フォードの自動車への憧憬は、彼が十三歳の小學生の頃、幼な友達達のジョン、フラワーと三輪車を乗り廻して居て時代から既に芽蒔えて居た。それから後彼は、何時でも自分の發明した自動車が、爆音高く飛び廻つて居る光況を、頭惱の中に描いては、其の成功の日を憧れて居た。フォードが廻技師をしてゐた冬の閑暇には、それが「農場機關車」となつて現はれたが、それから後は、月を重ねるに従つて益々其の憧憬は、

「何時か、必ず成し遂げてみせるぞ！」

といふ確い決心となつて、彼の心に強く波打つのであつた。

千八百八十九年（明治二十二年）の眞夏、或る日曜日の午後、遂にフォード

一枚の紙を伸べて、彼が長い間考へて居た自動車の圖を引いた。

「クララ、クララ！一寸来て見てくれ！」

僕は、今長い間考へて居た自動車の設計圖を作つたから………。」

フオードの招きに應じてやつて来た夫人に、彼は圖面を指しながら丁寧ていねいに説明するのであつた。其の説明を熱心に聽きいてゐると、自分達家族の者ものを乗せて夫の發明した自動車が、村から市街へと飛んで行く有様が、歴然と夫人の頭腦あたまの中に描き出されたのであつた。

「お話を伺つてゐると、確に御成功遊ばすと思ひます。」

「さうか、お前にもさう思へるか？」

と夫人を見上げたフオードの眼には、歡喜がみちみちて居た。

「ですけれど、此の設計圖は、あまり紙も皺だらけですし、又小さ過ぎもい

たしますから、何か適當な紙に私が寫しかへることにいたしませう。」

「さうか。そりや、すまんね。」

フオードは如何にも感に堪へぬといふ様に言つた。實際長い間の希望である自動車の設計圖が、やつこの思ひで紙の上に描き出されて非常な悦よろこびが彼の心に燃えてゐる時、その計畫を夫人が心から悦んで迎へてくれるばかりでなく、其の仕事に大變興味をもつて圖面迄も寫しかへてくれるといふのであるから、恰も彼は千人の味方を一時に得たよりも一層幸福を感じたのであつた。

それから間もない或る日のこと、その圖面は、フオード夫人の手で、立派に書きかへられた。そこでヘンリーは、自分の農園の内にある小さい仕事場しごとばの中で、最初の自動車に成功しようとして、朝早くから夜遅くまで、一生懸命せうけんめいに働いた。

「大分お疲れになつたでせう！。コーヒーをいれて參りましたから召し上つ

て、一休み遊ばしてはいかゞですか？

「そりや、ありがどう！。いつも、毎晩遅く迄心配をかけて誠にすまないな、一体今は何時頃かね？」

「四時近くになります。間もなく夜が明けませう。」

「さうか。もう、そんな時間なのか？。お前はいつでも遠慮なく寝るがいよ。」

フオードは、かうして時の過ぐるのも知らずに、夜明け近くまでも夢中になつて、自動車の發明に熱狂してゐる時でさへ、妻を慰めることを忘れなかつた。と同時にフオード夫人も亦、夫を慰め夫を勵すことを、殆んど毎日仕事の様にしてゐた。そればかりではない、夫人は夜明け近くなる迄も寝ずに、夫の世話をすることが、長い間毎晩の様に續いたけれども、まだ曾つて一度だつて不平一

つ言つたことはなかつた。

かうしてフオード夫婦の苦心と奮闘の日が、随分久しい間繰返へされてから後、ヘンリーがやつと拵へ上げた最初の自動車は、まだガソリンの時代が來てゐなかつたので、一個の汽笛で蒸気を發す仕掛のエンヂンであつた。前に農場機關車を拵へた時、非常に苦い經驗を嘗めたと全く同様に、此の最初の自動車を造る時も、フオードが一番苦しんだのは、矢張續け様に蒸気を發すことであつた。

言ふ迄もなく、フオードは、ありとあらゆる種類の汽罐で、幾度となく試験し又色々研究してみたのであるが、到頭最後迄フオードの自動車に適當する様な汽罐を手に入れることが出来なかつた。そして遂に農場機關車と同じ運命を又最初の自動車の上にも繰返へさなければならなかつた。

長い間寢食を忘れて、夫人に勵まされながらあらゆる困難と闘つて、自動車

の發明に熱中したけれども、フォードは到頭失敗に終つたのだから、大低の人間であれば發狂しない迄も、自暴自棄になるか、さもなければ目も當てられないほどの悲觀に陥るのであるが、フォードは決して自暴自棄にもならなければ又悲觀もしなかつた。彼は、依然として前途に洋々たる光明を認めてゐたのであつた。

そこでヘンリーは、元氣を盛り返すために考を變へて、デトロイト、エヂソン電燈會社に、夜勤の火夫を兼ねた技師として、そのウイリス街の支局で、一ヶ月三十五弗の給料を貰つて、毎晩十二時間づゝ働くことになつたけれどももし此の場合に、彼が最初の自動車に失敗しても猶その成功を急ぐために、飽迄もそれに嚙りついて居たならば、やがては却て氣を腐らして了つて、自分を信ずる力も段々に失つて行き、遂には發明家としての勇氣も或は追々に薄らいで行つたかも知れない。

又フォードは、父から譲られた四十エーカーといふかなり廣い土地を有つてゐたのだから、もし彼が意志の弱い青年であつたならば、再び窮屈な職工生活に這入らずに、きつと農園へ歸つたであらう！

けれどもヘンリー、フォードは、決して小事に齷齪する様な性質の持主でもなく、又現在の生活に安樂を貪る様な人間でもなかつた。彼は何處迄も自分の天職を信じて、其の研究に向つて進んで行く人間であつた。だからフォードが、再び職に就いたのは、其の元氣を盛り返すためと、又更に其の新らしい仕事から新らしい知識を得て、近い將來には必ず完全な自動車を作り上げなければならぬと考へたからであつた。

自分の天授の才能を深く信ずることの出来るものは、眞に天下の幸福者である。自分の力を信ずることが深ければ深いほど、どんな失敗に出遭つても、如何なる逆境に立つても、猶一層その將來に向つて奮起こそすれ、決して落膽

したり悲觀したりするものではない、常に希望に燃えてゐるものは、常に光り輝く光明の世界に遊ぶことが出来るものである。

九 熱する者は狂へる如し

——フオード再心自動車の製作にかゝる——

「大低の人は、失敗を先に考へる、それだから失敗するので、反對に成功するといふ自信がある時は、皆成功する。」

とは、ヘンリー、フオード自身の言葉であるが、實際彼はどんな場合に臨んでも、其心の奥には此の確乎した覺悟が深く刻み込まれて居たから、農場機關車が四十呎走つただけの成功で終つても、又機械ボギー車が全くその目的を達しなくても、それは何れも皆成功への過程であると考へて少しも落膽しなかつた。

ヘンリー、フオードにとつては、一時の失敗は決して永久の失敗を意味しなかつた。彼の全身に火と燃へてゐる熱血は、その永遠の戰鬥に於て必ず成功

九、熱する者は狂へる如し

の鍵を握らずにはおかなかつたのだ。此の信仰の様に熱烈な覺悟があつたからこそ、彼は一歩々々世界大の成功に近づいて行つたのである。

彼が、前後二回とも失敗に終つたのは、エンヂンを發す動力で、そして又最も苦しんだのも此の動力であつた。だからヘンリーは、何か他に自動車を運轉させるのに最も適當した動力はないかと、四時熱心に求めて居たのである。

丁度其の時に、イギリスで發行してゐる「學術雜誌」の中に、エンヂンの發達や、ガソリンの氣化作用によつて發するガスを、燈用ガスの燃料にすることなどがあつたのを、フォードは非常な興味をもつて讀んだ。なかでも彼が人知れず非常な期待をもち、其の進歩に注意の眼を見張つてゐたのは、ガソリン動力のエンヂンであつた。而し其の時にはそれはまだ一種の好奇心からであつて、猶十分自分のものにはなつてゐなかつた。

ところが、千八百八十五年に、デトロイドのイーグル鐵工所で、オット式の

エンヂンが破損して、それを修繕する必要が起つた。ところが當時デトロイド市には、誰一人としてオット式のエンヂンの事を知つてゐるものはなかつた。「困つたな。此の市には、これを修繕することの出来るものが一人もないのには……………」

「そんなことはありませんよ。御主人！」

「さうか。それは一體誰だ！」

「ヘンリー、フォード君です。」

「ふーん。フォード君に出来るといふんかね。」

「さうです。あの男なら何だつて出来ますよ。このデトロイド市は愚か、恐らくアメリカ一の技術者でせう！」

といふ噂が評判の種になつて、到頭フォードは、イーグル鐵工所から其のエンヂンの修繕を依頼されることになつた。けれども實はフォードも、まだ一度

もこの式のエンジンには、手を觸れた事さへなかつたのだ。而し彼の積み重ねた経験と強い自信とは、遂に自分から望んで其の仕事を引き受け、而も立派に成し遂げたのであつた。

此の出来事が、偶然フォードに、新しいエンジンを研究する機会を與へた。そこで彼は、千八百八十七年（明治二十年）にオット式の四廻旋式仕掛のエンジンを一臺拵へたが、それも立派に成功した。そこでフォードは益々其の自信を深めることが出来た。これが抑々彼が内燃仕掛のエンジンに手を着けた最初であつた。それから後、彼は、絶へずガスリンエンジンの研究に耽つた。手に入れることの出来る限りの書物は皆讀んだ。けれどもフォード自身も言つてゐる様に、最も大切な知識は矢張實地の仕事から多く學んだのであつた。

此の當時は、智慧のありさうな連中でも、瓦斯エンジンは逆も蒸汽エンジンとは、競争出来ないと言ひ張つて居た。だから内燃仕掛のエンジンが、限らない幸

福を我々人間に齎らさうなごゝは、誰一人だつて夢にも考へてはゐなかつた。

とはフォード自身の言葉を、其の儘借りて來たのであるが、さうした時代に、ガンリンエンジンに目をつけ、その研究を怠らなかつたヘンリー、フォードは確に時代に百歩を先んじた人間であつたのだ。かくしてヘンリーは、周囲の人々の言葉には耳も傾けずに、自分の確く信じてゐたガンリン、エンジンの研究に耽つてゐたが、猶十分の確信は得られなかつた。

ところが、或る日のこと、フォードは、デトロイド市の製壘工場で使つて居た速度は極めて遅いが、ガンリンで發動する仕掛のエンジンをみた。そこで始めて彼はガンリン、エンジンを使つて自動車を造り上げる決心を確めることが出来たのである。だからフォードが、製壘工場でガンリン、エンジンを見た時には、まるで狂人の様には、

「これだ、ガンリン！。ガンリン！」

と夢中になつて大きな聲で呼んだ。一生懸命に仕事をしてゐた職工は喫驚して鸚鵡返しに

「馬鹿野郎！。氣をつける。何だつて唐突に大きな聲をしゃアがるんだ！」

と彼を怒鳴り付けたのであつた。

それほど彼の心は、常に動力のことに熱中してゐたのだ。其の時彼の歡喜はそれほど白熱したのであつた。熱した者は狂へる者、とは昔から能く言ふことだが、彼は常に仕事に熱狂することの出来る人間であつた。だからフオードは、世の中の人々から能く狂人扱にされたのである。

その後間もなく彼は、再び自動車の製作にとりかゝつたのであつたが、それから後の彼には全く休息する時間がなかつた。なせならその時フオードは、エヂソン會社の技師長を勤めて居た。彼は入社してから間もなく其の人格と技

倆とが多く、重役から認められて、ウイリス街の支局から直に本社に轉勤する様になつたばかりでなく、遂に後には技師長に昇進して、此の社で最も多い給料である一ヶ月百三十五弗（我が國の約三百圓）を貰ふ様になつた。言ふ迄もなく、それは非常に重要な地位であつたから、退引ならない大切な所として澤山な仕事、何時でも彼を待つてゐたのであつた。だからフオードは勤務の餘暇を自由に得ることなどは到底出来なかつたので、どうしても新案の自動車を造るのには、社が退けてから夜遅くまで働くより外に道はなかつた。従つてフオードの姿が、彼の仕事場から現はれる時は、何時も大低夜明け近くの三四時頃だつた。

かうして彼が、夜晝、殆んど不眠不休で、ガンリン、エンヂンの研究に耽つてゐると知つた時、丁度その少年時代に機械弄をして父の不機嫌を増させたと同じ様に、エンヂン會社の社長を不機嫌にしたのであつた。

けれどもそれは、フォードが研究する事に反対したのではなく、唯だガソリン、エンジンを研究することに限つて不賛成だつたのである

「ヘンリー君！君は近頃ガソリン、エンジンの發明で夜の目も碌々寝ずに研究を續けてゐると言ふ話だが………。そりや實際かね？」

「お仰る通り、やつております。」

「研究といふことは、何に限らず眞に結構なことだが、而しガソリンの研究だけは、よした方がいゝよ、君！」

「社長！御言葉を返してすみませんが………。私の目的を達するのには、どうしてもガソリンでなくてはならないのです。」

「何に？ガスだど？ヘンリー君！そりや駄目だよ。」

「電気だよ！君！これから研究するならば、電気が一番だ、電気をやり

たまへ。君！」

社長は、どんなにヘンリーが、ガソリンの將來に有望なことを説いても、飽迄電氣の有望であることを主張して譲らなかつたのであつた。

けれども、それにはそれ相當の根據があつた。丁度其の时分、電氣が非常に發達して、現在吾々が、期待してゐるよりも、もつと以上の發達をするものと皆考へてゐた。けれどもガソリンに就ては、此の後だう發達するかさへ誰だつて考へてはゐなかつたのだから、社長がフォードの爲を思つて、ガソリンの研究に反対したのも決して理由のない譯ではない。だから、其の當時にあつては相當に機械のわかる人々でも、フォードの此の研究には誰も賛成するものはなかつた。

彼の近所の人々は、フォードが「馬なし車」を、再び製造してゐる事を知つて、

九、熱する者は狂へる如し

「人間は、實に悪氣がないんだが、可愛相に到頭氣が狂つて終つたんだせ。」
「さうかも知れませんがねえ。此頃は、裏の納屋へ這入つたぎり、殆んど姿もみ
せませんから……。ほんたうに可愛相にねえ！」

到頭フオードは、近所の人々から、狂人にされて了つた。それほど彼は、ガ
ソリン自動車の發明に熱狂したのであつた。

「僕が、自動車の製作に熱中してゐた頃には、多く睡眠を食ふことはしなかつた。

エヂソンは、多く眠らないで仕事をしたから、驚くべき人傑だと世界は云つてゐる。僕はエヂソンが、それほどまで興味を集中することが出来たから、偉いと思ふ。」

その後ヘンリー、フオードは、言つてゐるが、實際彼はエンジンに優ることも遜らぬ程、寢食を忘れて、自分の仕事に興味を集中したのであつた。

誰にしたところで、自分の仕事に深い興味をもつて、熱中すれば、決して直ぐ寝くなつたり、おき疲れたりするものではない。直ぐ寝くなつたり、疲れたりするものは其の仕事に興味を有たないか、さもなくば給金ばかり當にして働くからで、成功を目標にして常に仕事に熱中することが出来るならば、誰でもエヂソンやフオードの様に偉大なる功業を、世界の上に築きあげることが出来るのである。

十 自動車は誰が發明したか

——フォード最初のガソリン自動車を作る——

他人が造つたものを真似て拵へるのでさへ、一通りの苦心ではないのに、まして自動車のことなど考へる者さへないばかりでなく、フォードが「馬なし車」を、夜の目も寝ずに夢中になつて拵へて居ると聞いた人々は、

「人間は、ほんたうに悪氣がないんだが、可愛相に到頭氣が狂つて了つた。」と噂し合ふほど、「馬なし車」が、不思議なものに考へられてゐた時代に、自動車を發明しようと思つたのだから、その苦心も亦並大抵でなかつたことは、實際想像以上であつた。

だから、フォードは、一から十まで、何もかも自分の手で苦心して作り出さなければならなかつた。殊に最も彼を苦しませたものは高速力のガソリン、

エンジンであつた。この時分、高速力のガソリンエンジンに就ては、かなり機械に明るい者でも知つてゐなかつた。でフォードは、それを發明するために苦心したばかりでなく、それに必要なものは、どんな細かいものも、小さいものも皆自分の手一つで造らなければならないのであつた。だから彼は、欲しいと思つた品は、どんな品でも、皆自分の仕事場で、自分の手で拵へ上げたのであつた。

かくしてヘンリー、フォードは、毎晩夜更け過ぎ迄、色々な困難と闘ひ、あらゆる苦心を重ねて、自動車の發明に、彼の熱心の血を沸すのであつた。

其の當時、フォード夫人は、良人の仕事場に出かけて行つては、

「毎晩、遅くまで能くありません。さぞお疲れでございませう！」

私に出来ませう様なことは、何でもお手傳ひいたしますから、御遠慮なくお

仰つて下さいまし！」

「あゝ、ありがとうございます。だうもお前に迄、いろいろ苦勞をさせてすまんね。而し今度こそは必ず成功する覺悟なんだから、今暫くの間辛抱してもらひたいものだ！」

「辛抱どころではありません。私は唯起きてゐるだけで、何の御役にもたちませんで……」

「いや。決してさうではないよ。お前がさうして常に僕を勵してくれるので、僕は、千尺の味方を得てゐる様な氣持がする！」

といふ彼の言葉の中には、長い間の夫人の親切に報ゆる無限の感激が罩められてゐた。

「御言葉は恐れ入ります。私も必ず御成功遊ばすと確く信じております。」

一日も早く自動車が、私達家族の者に乗せて走り廻る日が、待ち遠しい様な気がいたします。」

「さうだ。僕も自分の拵へた自動車に、早く乗せてやりたいと思つてゐる。」

「世間の方々が、いろ／＼妙な噂をしてゐらつしやるとか、度々耳にいたしましたが、良人は決してそんなことを氣に遊ばさず……。ゼヒ御成功遊ばすまで、やり遂げて下さいまし。」

「あゝ、そりや、やりとげるとも、きつとやりとげてみせるよ。そして悪口を言つてゐる者も、ついでに驚かしてやるさ。アハ……。」

かうして夫人に慰められると、フオードは、何時も一層勇氣の増すのを覺へるのであつた。

フオード夫人は、良人を飽迄も確く信じてゐた。だからヘンリー、フオードが一度思ひたつたことは、どんな事であらうとも、必ず成し遂げると確く信じて

ゐた。そして夫人は、自分の力の及ぶかぎりには、良人を慰め、フオードを勵すことを怠らなかつた。

かくして、あらゆる困難と闘ひ、いろ／＼な苦心を経てからフオードが拵へ上げた自動車は、ボギー車の様な形態をしたもので、二インチ半のボア（口径）をもち六インチのストローク（衝程）のシリンダー（汽笛）を二箇並べ、後の車の軸の上に備へ付けた仕掛のものであつた。

ヘンリーの作つた（ガソリンのボギー車）は、デトロイド市では、此の世創まつてから始めて見た自動車であつた。その上に随分久しい間、此の市街には唯一つしかない自動車であつたので、フオードが始めてこの自動車を乗り出した時には、先に「可愛相に氣が狂つた」と噂し合つた人々も、「彼奴は悪い夢を見てゐるのだ」と悪口をたゝいてゐた職工仲間も、そして市の人々も、皆同様に驚異の眼を見張つたことは言ふ迄もない。

だからフオードは、自動車に乗つて、市街の何處へ出かける時も、常に鎖を
持つてゐた。なせならば、大勢の人達が集つてたかつて、珍らしさうに弄り廻
すばかりでなく、到頭終には何とかして動かしてみようとするので、彼は自動
車から降ると、何時でも直ぐそれを街燈の柱に鎖付けにするのであつた。

又其の音は、始めて此の世で聞く様な騒々しい異様の音であつたので、多く
の人々を驚し常に馬を脅したことは言ふ迄もない。それと同時に時々交通
妨害の厄介物扱にされて、巡査から怒鳴りつけられたことも度々であつた。

又近處の人々の中には、朝の二時か三時に、フオードのエンジンが劇しい爆
音を立てるために、目を覺して了うので、不平を言つたり、怒つたりする者も
あつた。かうしてフオードの自動車は、デトロイド市の人々から非常に珍らし
がられると同時に、いろいろ五月蠅事が後からくと湧いて來たのであつた。
ところが、ヘンリー、フオードにとつて、最も都合のよかつたことは、彼

と非常に親しい間柄であるウィリアム、シー、メーベリーが、その當時市長を
してゐたことであつた。

「メーベリー君！ 到頭拵へ上げたよ。」

「うん。さうだな。そりや豪氣だ！ 一度僕も乗せて貰ひたいものだね
而し危険なことはないかね？」

「いや。その心配なら無益だ、何時でも乗せてやるから、遠慮なく乗り給
へよ。」

「ところで今日は、何か用か？」

「いや、實は自動車のことで、ゼヒ君の力を借りたいと思つて來たんだが
ね。」

「自動車のことツて、一体何だね？」

「だうも、市の者から、毎日の様にいろんな苦情が出て閉口してゐるんだ。

そこで、何とかい、方法はないかと思つてね。」

「うん、その事か。その事なら既に知つてゐるよ。」

心配せんでもいい。若し誰か君の事で、市役所へ苦情を持ち込んで来た

場合は、僕が極力保護してやるよ。」

「ありがたう！。それで、僕もやつと安心したといふものだ。」

ねえ君！、この間も、巡査にひどく怒鳴り付けられたんだ。」

「アハ………。そりや、ごうも。」

あんまり君が、自動車をブー／＼やるもので、誰も彼も癪にさはるのかも

知れんよ。まあいゝさ。そんなことは、これから後は。僕が引受け

るから心配せずにドシ／＼走り廻すさ。そして一層立派なものを造り出した

まへよ。」

メーベリーは、友情にみちた心と言葉とを以て、フォードを勵すのであつた。そして而も市長としての確い約束までもしてくれた。實際此の場合、彼にとつて此の位結構な保証はなかつたのである。

そこでヘンリー、フォードは、アメリカ全土の内で、始めての而も唯一人の公認自動車運轉手の名稱が與へられたわけである。

ヘンリー、フォードが作り上げたガソリン自動車は、最初の蒸汽エンジンの自動車から見れば、それは非常に進歩したものであつた。一時間に二十五哩から三十哩を樂に走ることの出来る高速力のガソリン、エンジンが据へつけてあつた。けれども此の自動車は、唯後退りが出来ないだけで、賣物にはならなかつた。そこでヘンリー、フォードは、完全なものを作り上げる爲に、最後の勝利を得る爲に、再び二度目のガソリン自動車を作らなければならなかつたのである。

十一 最大の努力は最大の成功を生む

——ヘンリー、フォードは遂に自動車を完成した——

「フォードさんが、到頭「馬なし車」を發明なすつたさうですね。

貴女御覽になつて?。」

「えゝ。見ましたわ。そりや随分すばらしいものよ、まるで矢が飛んで行く様なんですの。」

「さう。そんなに早い、汽車とごちつが早いこと?。」

「そりや、貴女!。汽車よりかすつと早いわよ。私達が乗つたら、きつと眼をまはすでせう!。」

「まゝ、そんなに?。」

「それはさうと、今迄は随分妙な噂をしたものね。」

十一、最大の努力は最大の成功を生む

「全くよ。悪気はないけど、到頭狂人になつて、可愛相だなんて、随分酷いことを言つたものね。」

フォードさんは、それを知つてゐらしたのでせうかしら？」

「そりや、知つてゐらしたでせうよ！。あんなに評判したんですもの……奥さんだつて、きつと知つてゐらしたに違ひないわ。」

「けれども、そんな噂なんか、發明家の耳には這入らないものよ。」

「そりやさうかも知れませぬね。」

「それに奥さんは、實に偉い方なんですつて、何でも毎晩遅くまで、フォードさんのお仕事を手傳つてゐらしたといふことよ。」

「さう。偉いわねえ！。」

「此間迄は、フォードを狂人扱にして噂し合つて居た口さがない女達も

遂に彼が馬なし車に成功したと知ると、かうしてフォード夫婦を讚めたゝへるのであつた。まして血氣の少青年の好奇心や興味を沸きたゝせたことは言ふ迄もない。當時デトロイド市を中心に近郊近在では、誰も彼も皆フォード自動車の話で持ちきつて居た。

子供達は、それらしい爆音が、遠くの方から微に聞へて來ても、

「やア。來た〜。馬なし車だ！。」

と先を争つて、何時も駆け出すのであつた。

かうしてフォード自動車が多くの人々から非常に珍らしがられ、大變に持て囃されてゐる時、デトロイド市のチャールズ、エンスリーといふフォードと知合の男が、或る日突然にフォードの家へやつて來た。

「フォード君！。君、到頭成功したね。お芽出度う！。」

「いや、まだ十分成功したとは言へないよ。」

「どうして確に大成功さ。世界的の成功だよ。」

「それはさうと、エーンスリー君！。僕の苦心の結晶を見てくれんかね。」

「そのことなら、僕の方から寧ろ進んでお願ひしたい位なんだ。ゼヒ見せてくれたまへ。」

フォードは、臨時の車庫に當てた裏の納屋に、エーンスリーを案内して、自分が長い間苦心して拵へあげた自動車の機械を、それからそれへと委しく説明してエーンスリーに聞かせるのであつた。

「成程ね、君の説明を聞くと、一層その苦心のほどが偲ばれるよ。實にすばらしいものだ！」

「いや。そんなに讃められる程まだ十分ではないが、とにかく八九分通りの成功さ。だからもう少し研究すれば、必ず完全なものに仕上げられる譯なん

だ。」

エーンスリーは、かなり機械に明るい男であつたから、彼の説明を聞いて一層讚嘆を深めたが、フォードは少しも自分の成功を誇る氣色もなく飽迄謙遜するのであつた。機械を彼處此處弄り廻してゐたエーンスリーは、やがて暫く経つてから、

「ところでね。フォード君！。今日、僕が突然やつて來たのは、外のことでもないんだよ。實は、此の自動車を是非譲つて貰ひたいと思つてね……………」

フォードは、エーンスリーの此の申出に意外の感を懷かない譯には行かなかつた。なせならば、彼は自分の發明した自動車が、デトロイド市の人々の好奇心をそゝり、常に話題の種を蒔いてゐることは耳にしてゐたが、又一方では厄介物扱にされてゐるばかりでなく、贅澤品以上に珍らしがられるだけで、誰一

人として欲しがるものもない時に譲り受けたいと申出たのだから、彼が不審に思つたのも決して無理ではなかつた。

「そりや、君のことだから完全なものならば、いつでも譲るがね、何にしるまだ未成品なんだから……」

「君から言はせれば、或はさうかも知れんがね。僕から見れば、實に立派なものだよ！。所謂君の未成品でもかまはんから、是非譲つてくれ給へ。」

フォードは、有つて生れた性質から、猶不完全だと考へてゐる物を他人に譲ることは、飽迄も好まなかつたけれども、エーンスリーが、

「それでもいゝから、ゼヒ譲つてくれ給へ。」

と再三再四飽迄も言ひ張つて、どうしても聞き入れないので、到頭彼は最初のガソリン自動車を譲り渡すことにした。これがフォードにとつては仰々最初の販賣であつた。

丁度其の時、フォードは、もつと完全な自動車を新らしく拵へやうと考へてゐた際であつたから、結局此の申出は、彼にとつて非常に好都合であつた。

そこで、彼は、エーンスリーから受取つた二百弗を、第二のガソリン自動車を作る費用にあてたのであつた。

ヘンリー、フォードは、どんな事でも仕遂げなければ決してやめたことがなかつたが、殊に自動車の發明は、自分の生涯の仕事であると確く信じてゐたので、幾度何度でも完全に出來上る迄は作り更へさうと、堅く心に誓つたことは言ふ迄もない。もつと詳しく言へば、フォードが第二のガソリン自動車を拵へようと決心したのは、第一のガソリン自動車を始めて運轉した刹那からであつた。そしてフォードは、その製作に取りかゝつてから丁度四年目の千八百九十八年（明治三十一年）に遂に完全なガソリン自動車を拵へ上げたのであつた。

二度目のガソリン自動車は、此の前のガソリン自動車に比べると、操縦とい

ひ走り具合といひ、あらゆる點からみて申分がなく、又自由自在に後退りの出
 来るもので、其の形も以前のものよりはすつと大きく、エンジンも二個の汽笛
 四廻旋のもので、其の衝程は四吋であつた。のみならず此のエンジンは、水で
 冷却する仕掛になつてゐて、車輪は、針金の輪に護謨のタイヤが附けてあ
 つた。

かくてヘンリー、フォードは、十三歳の小學生時代に、幼な友達のジョン、
 フラワリーの三輪車の上で考へてゐたよりも、すつと立派な本物の自動車を發明
 することが出来たのである。フォードの長い間の希望は、長い間彼が艱難辛
 苦に打ち勝つた不斷の努力によつて、遂にその目的を完全に達することが出来
 たのであつた。

人間は、誰でも皆安樂な生活を望むものである。けれども安樂な生活は、何
 時でも決して眞に人間を成功に導くものではない。昔から艱難汝を玉にすとは
 能く言ふことであるが、もしフォードが此の場合に安樂な生活を望んだとした
 ならば、彼は必ず自動車の發明を思ひきつて、氣樂な農園の主になつたに違ひな
 い。もし又フォードが大金持になりたいために、其の仕事に勢だしたとすれば、
 寝る間も忘れて十何ヶ年も艱難辛苦と闘ひ、惱漿や肉體を苦しめなかつたであ
 らう！必ず馬鹿らしくなつたに違ひない。そしてつと樂に金儲けの出來さ
 うな仕事に手を出したであらう！

けれどもヘンリー、フォードには、さういふ考は薬にしたくもなかつた。
 彼は唯だ自動車の發明を完全に成し遂げて、社會の爲に盡したいといふ正しい
 覺悟だけが、常にその心に燃えてゐたのであつた。だからこそ彼は、到頭十何
 ケ年間もかゝつてあらゆる艱難辛苦と闘ひ、遂に自動車を發明することが出来
 たのだ。それがもし此の考を顛倒して、眼先の安樂や利益にばかり走つたな
 らば、フォードは恐らく失敗したか、でなければ失敗しない迄も現在の様な大

成功を世界の上に獲て、自動車王の名を世界の津々浦々迄も轟すことは到底出来なかつたであらう！。

「此の世の中で、一番大切な必要なものは確い決心である。それなのに我々は常に此の必要なもの、半分も、つてゐない。僕はやつてみる。そしてきつと成功する迄やり遂げる。決してやめない。といふ時に直ぐ我々は、僕には出来ないと考へて終ふ。

我々が爲さずに捨て、おく事は、此の世の中には、餘りに澤山ある。何故今日、もつと多く此等のことをしないのであらうか？。

世の中は、常に我々のしななければならない澤山な仕事を、我々にさせようとして兩の手を擴げてまつてゐる。それなのに我々は、いつも苦勞の多い世の中だ。とばかりこぼして、しななければならない仕事は、餘りしないのである。し。

とヘンリー、フオードは言つてゐるが、實際も亦さうである。人間が成功の歡喜に出遭ふのも、失敗にうめくのも、世の中で一番大切な此の心掛一つである。

フオードは、常に此の世の中で、一番大切なこの心掛を持つてゐたからこそ彼は此の世の中のために「しななければならない大切な仕事」を到頭成し遂げて世界の人々から持て囃され、富は流るゝ水のように、フオードを目がけて流れ込んで來たのであつた。

誰でも、此の世の中で一番大切な心掛をもつて絶へず「世の中の爲にしななければならぬ仕事」をしてゐさへすれば、やがては必ずヘンリー、フオードの様に、世界の多くのの人々から持て囃されるほどの世界的成功を獲て、其の名を世界の隅々迄轟すことは決して不可能なことではない。だから自分の最も適した職業を見出して、その仕事に倦まず弛まず一心に努めて居さへすれば、

招かなくとも自然に、富、名譽、幸福は、形に従ふ影の様に、その人に向つて訪れて来るものである。

眞に努力は、成功の母である。最大なる成功は常に最大なる努力に伴つて来る賜物に外ならぬのである。

十二 有名な自動車競争

— 生命がげの努力で一躍名選手となる —

ヘンリー、フオードが二度目のガソリン自動車を完全に拵へ上げてから大分月日経つて、アメリカ国内には自動車競争の持て囃される時代が来た。やがて競争といへば、誰も彼も直ぐ自動車のことを思ひ浮べる様になつた。

丁度其の時分、アメリカ五大湖の一つであるエリー湖を挾んで、デトロイド市の向側に、グリーンブランドといふ市があるが、此の市にアレキサンダー、ウイントンといふ人が住んでゐた。ウイントンは、自分で競争自動車を造つて、それにウイントンといふ自分の名前をつけ何處の自動車競争にもきつと加つた。その當時、アメリカ国内には、グリーンブランドのウイントンを相手にしては誰一人として自動車競争に打ち勝つものはなかつた。何日何處の競争でも、優

勝旗は必ずウイントンのものにきまつてゐた。彼はそれ程に自動車競争の勇將であつたのだ。

「グエスト君！君、昨日の競争をみたか？」

「無論ぢやアないか。」

「實にすばらしいものだつたね。ウイントンの活躍振と來ては……………」

「うん。實にすばしかつたね。確に彼は一騎當千の將だ！」

「どうだ君！何回やらうが、誰を相手にしようが、判でおした様に、最後の勝利は、きつとウイントンにきまつてゐるんだから、實に偉いもんだね。」

「全く君の言ふ通りだ。實際珍らしい名選手さ。彼を勇將と言はずして、誰をか言はんやだね。」

實にウイントンの評判は、すばらしいものだつた。人々は口を極めて彼を讚めた。又實際ウイントンは到處で人々の血を沸す様な競争振を見せた

のであつた。彼は時々その競争中に、色々な餘技をみせて見物人をヤンヤと言はせることもあつた。又時としては樂に勝てる相手でありながら、殊更後になつたり先になつたりして、ごつちが勝つかと、見物人をヒヤ／＼させ、いざ際ごい所まで來ると優勝するといふ遣方をして、拍手の波を浴びる様なことまでしました。だから考深い人々からは、却て彼の態度が自然傲慢に見られることが多かつた。

「エドガー君！僕はごうも、あのウイントンの傲慢極まる態度が、何日でも癢に觸つて堪らんよ。」

「さうだ。その點は、サミュエル君と僕も同感だ。確にあの態度は不愉快なものだ！」

「だからね。君！僕はいつでも競争をみる度に、誰かあの高慢な鼻をへし折るものがないかと、常に期待してゐるんだがね……………」

ところが、君、何日でも、きまつて彼が優勝旗を握るんだから、益々癩の虫がおさまらない譯なんだ。

まして、あの勝ち誇るキザな様子を見ると、一層憤然として殴つてやりたくなるんだ。」

さういひながら、シカゴ大學の政治科生サミュールは顔面を赤くし肩を怒らし腕を張つて、今にも殴りかゝりさうな風をしながら昂奮するのであつた。

「まア。君！。そんなに憤慨したまふな。その内には必ずあの天狗の様に高くしてゐる鼻柱を、根もとからポキンとやる勇者が、現はれて来るにきまつてゐるから……。」

「さア。それは何麼かしら。僕は到底望まれんことだと思ふがね。」

「いや、決してさうではないよ。君！。傲る者は久しからず、ソロモンの榮

華は一朝の夢だ。ウイントンの天下もさう長いものぢやアないさ。」

と哲學生エドガーは、冷靜な態度で飽迄も主張するのであつた。

世の賞讃の反面には、かうしてウイントンを蛇蝎の様に嫌つて、彼の惨敗する日を禱つてやまない多くの人もあつた。けれども、其の後何處の競争でも、ウイントンに打ち贏つほごものは、絶へて一人もなかつた。そして彼の勝ち誇るつた心は、益々彼を傲慢にして行くのみであつた。

「誰でも進んで相手になつてやる。我と思ふものは申込め！」

と彼は、態度でも言葉でも、何人にも示す様になつた。そこで彼を嫌つてゐるものは益々彼を嫌ひ、彼を最負する者は益々彼を勇者だと讃めたゝへるのであつた。

それから後、或る日のこと、デトロイド市のグロツスポイント競争場で、強

敵ウイントンを向にまはして華々しく競争をする新手の選手が現はれたといふ評判が、耳から耳へと傳つて、デトロイド市の人心をいやが上にも沸騰させた否アメリカ全土にわたつて大評判になつた。

この噂を耳にした哲學生のエドガーは、早速友人サミュエルの家を訪ねて。

「どうだサミュエル君！ 到頭僕の言つた通りの口が來たらうが。」

「いや。まだわからんさ。今のところでは、唯新手の選手が現はれたといふだけで、勝負はこれからぢやアないか？」

「そりやさうだが、僕は必ずウイントンが負けると直観してゐるんだ。どうしても負ける運命になつてゐるんだせ、君！」

「さうは言へんよ、そりや少し平生の君にしては亂暴すぎる。」

「いや決して亂暴ぢやアない、僕のたしかな直観だし又信念なんだから

.....

「信念とは、聊か驚かざるを得ないね。そりや僕だつて、ウイントンが負けることを、君以上に切望はしてゐるが一度だつて負けたことのない彼を、如何に自信ある新手の選手でも、よし君の信念にしたところで、僕はまづむづかしいと思ふがね。」

「さうか。絶つて君が、さういふなら、もしウイントンが負けた時は、君一體だうするつもりかね？」

「奢るさ。大に奢るよ。僕は財布を倒にして奢る。きつと奢るぞ！ 君！」

サミュエルもエドガーも、すつかり昂奮して了つて、こんな約束迄して競争の日をまつのであつた。

ウイントンを讀めたへてゐる者も、彼を毛虫の様に嫌ひぬいてゐる者も、ともに今度の競争には非常な興味を有ち、夫々違つた期待を懐きながら、今や

遅しと一日千秋の思をして、その當日を待ちうけるのであつた。

やがて競争の日は来た。満都の人氣は、いやが上にも沸騰した。老若男女

我もくくと、グロツスポイント競争場を目がけて潮の如くに集つた。場の内

外は、今迄何處の競争にも決して見られない程の賑やかさであつた。

時は来た。號砲一發！競争の始まる報知である。さしにも騒々しかつた場

内は、恰も水を打つた様に静まりかへり、見物人は固唾をのんで控へてゐる。

すると、二臺の自動車が、出發點に近づいて来た。言ふ迄もなく一臺はウイン

トンで、あとの一臺は新車の選手を乗せた自動車である。

一秒！一分！時は流れた。選手の全身は血と燃え肉は躍つた。見物人は

手に汗を振つて時の來るのを待つてゐる。

號砲一發！再び場内に轟きわたり、爆音勇ましくスタートは切られた。一後



一先！互に先を争つて二臺の自動車は疾風の如く飛んで行く、旗を打ち振る

人、帽子を上下する人、ハンカチーフを風に翻す者、喚呼の聲は天に轟き地

も亦裂けんかと思ふばかりに、アメリカ全土から集つた浮塵子の如き人々の熱

狂した聲援は、恰も雨か霰の様に兩雄の上に浴びせかけられた。

兩雄を乗せた二臺の自動車は、場内を一廻り、二廻り段々廻数を重ねるにつ

れて、決勝は刻々と逼つて来た。ウイントンも新車の選手も互に必死となつて

闘つて居る。満場の血は沸き肉は躍り、熱狂は極度に達した時、俄然又號砲一

發！遂に勝敗は決したのであつた。

群衆は、優勝者を目懸けて潮の様に押し寄せ、胴上げをしながら歡呼の聲を

あげた。誰も彼も狂へる如く熱しに熱した。

かくも、デトロイド市の近郊近在は勿論、アメリカ全土にわたつて人氣を呼

び集めた、榮ある競争に打ち勝つた勇者の歡喜は、ごんなであつたらうか？。定

めし天にも昇る心地がしたことであらう！
 やがて、勇者は、手に優勝旗を翻し、榮ある自動車に乗り、見物人に挨拶しつゝ、場内を一週した。かくて全アメリカ人の血を沸した晴れの勝負は遂に幕を閉じたのであつた。

ウイントンが、勝つたか？

新車の選手が敗れたか？

長い年月一度だつて破れたことのないウイントンを負かす程の勇者は、此のアメリカ國內には一人もないと、多くの人々は確く信じきつてゐた。

だからウイントンも今迄には全く見たこともない程生命がけて、長い間の名譽を保つために闘つた。又新車の勇者は、全戦全勝の猛勇ウイントンに向ふに廻して勝負をするのであるから、彼が全力をあげ死力を盡して奮闘したことは言ふ迄もない。

まだ曾つて選手が、これほど生命がけて競争し、見物人も亦これ迄これ程熱狂したことは一度もなかつた。實際アメリカ創つて以來始めての晴の舞臺であつた。

ウイントンが、勝つたか？

サミュールの財布が、空になるか？

デトロイド市民の興味をそゝり、全アメリカ人の血を沸した此の榮ある勝負は、一體だうなつたであらうか？

哲學生、エドガーの豫言は、遂に全く的中したのだ。さしも全戦全勝をもつて長い間勝ち誇つて居た、ウイントンは惨敗したのであつた。

勿論サミュールは、財布を倒にしてエドガーと歡杯をあげたが、ウイントンの傲慢を憎み其の惨敗の日を憶れてゐた多くの人々も亦、夫々祝宴を張つて長い間の溜飲をさげたであらう！

此の意外の勝負が、デトロイト市は勿論全アメリカ國內に異常な響を傳へたことは、今更改めて言ふ迄もないことである。かくて新車の選手は、一躍してアメリカの名選手となつた。勇將となつた。其名は津々浦々迄も響き渡つた。

そも其の勇者とは、誰であらうか！。そは言ふ迄もなく本篇の主人公ヘンリーフォードその人に外ならないのであつた。

けれども、フォードは、もとより心からウイントンと勝敗を争ふことを好んでゐたのではなかつた。彼はどつちかと言へば寧ろ競争なぞすることは好まなかつたのであるが、なにしろ此の時分には、自動車に對する知識が一般に幼稚であつたのと、競争熱が非常に熾んであつたために、何よりも一番早く走ることの出来る車が、最も優れた自動車だと早合點する世の中であつたから、フォードは生れつきの負け嫌と、好奇心も手傳つて、勝ち誇つてゐるウイントンを

打ち敗り、自分の拵へた自動車の威力を示してやらうと、彼は以前常に使つてゐたものよりも一層小ぢんまりとした型で、二箇のシリンダーをもつた密閉式のエンジンを發明し、それを其車臺の上に取り付け幾度か試験して見て、

「これなら、必ず速力が出る。ウイントンとの競争にも、キツと勝てる。」

といふ確乎した自信を得たので、そこでグロツス、ポイント競争場で、雌雄を決し、猛勇ウイントンを美事に打ち破つて、一躍アメリカの勇者の名を勝ち得たのであるが、フォードが競争場に出る迄には、どれほど高速力エンジンの發明に苦心したか、それは到底言葉では盡されないものがあつた。何事でも勝利を占め成功を獲るのは、決して偶然ではない。人知れぬ多くの苦心や生命がけの努力が拂はれてこそ始めて獲られる結果である。だからどんな事でも、だういふ場合でも、確乎した覺悟をもつて生命がけで努力すれば、必ず最後の勝利は獲られるものである。

十三 眼先の利益を捨て、驀地に進め

——フォードは遂に眞の使命に奮起した——

或る日、ヘンリー、フォードは、何日にもなく改まつた態度をして、親しい友達であるエヂソン會社のダヴ支配人と、其の重役室に對ひ合つて椅子を占めて居た。

「ダヴさん。君には、長い間色々厄介になつたが、僕は今度愈々辭職することに決心した。それで、君から社長に然るべく取りなして貰ひたいと思つてやつて來た譯なんだ。」

「何に？ 辭職する！ 君がか？ 一體どうしたといふんだ。あまり突然で、僕には一向譯がわからんよ。君！ どうして辭職するんかね。」

ダヴ支配人が、驚き且つ訝つたのも決して無理ではない。丁度その時彼は、

エヂソン會社の技師長である最高の位置を占め、一ヶ月百三十五弗（我が國の約三百圓）といふ此の社で最も多い給料を貰つてゐたのだから、誰の眼からみても、決して不平なごあるべき筈がなかつた。然るにフォードが突然辭職を申出たのであるから、平生非常に親しくしてゐる間柄で、何もかも知りぬいてゐるダヴ支配人も、其の理由を知ることが出来なかつた。そこで、支配人は矢繼早に言葉を繼いで、

「ねえ、フォード君！。君は、社に對して何か不平でもあるかね？。

もしさうなら、さうと、何の遠慮もいらぬ間柄なんだから、僕にだけ打ち明けてくれ給へ。君の話を聞いた上で、ごんなにも亦力になるから……

……ねえ、フォード君！。話し給へよ。」

「ダヴさん！。決してそんな譯ぢやアない。何もかも君は知つてゐる筈だ。僕



には何時だつて不平といふ文字は不必要なんだ……」

「うん、そりや、僕にも能く解つてゐるが、しかし餘り唐突に辭職するなんて、妙な話を持ち込むので、或は不平でもあるのではないかと思つたんだ。

僕の考へ違ひは許してくれ給へ。だがさうだとすると、猶更譯がわからぬいぢやアないか！。」

「そりや、さうだらう！。實はね、君も知つてゐる通り、僕もやつと長年の苦心が報いられて自動車を完成することが出来たから、今度は是非それを實際の役に立てるために造り出したいと思ふんだ。

そこで、勤めてゐたのでは到底其の目的を十分に達することが出来ぬから、それで辭職する事に決心した譯なんだよ。」

フォードの平生を知り、フォードの人格を信じきつて居るダヴ支配人も、此の時ばかりは、フォードがガソリン自動車を作ると聞いて、社長が反對したの

と同様に、友情に厚い彼は、

「さうか、それなら、さうしたまへ。」

とは到底賛成出来なかつた。

「成程、フオード君！。考としては實に立派なものだと思ふ。僕も友人として至極賛成だが、而し能く考へてみたまへ、決して世の中はそれ程進んではないせ君！。」

實際さうだとすれば、君が如何に社會の奉仕だと言つて、造りだしてみたところで、買手がなければ結局どうする？。」

「君の言ふ所は、大に尤だと思ふけれども、ダヴさん僕には深い自信があつて、どうしても、どんな困難に出遭つても、必ず目的を達する覺悟なんだから悪く思はないでくれたまへな。」

友情に厚い君の忠告は、心から感謝するが、ゼヒやつてみるつもりだ。甚

だすまないが、君から社長に其の理由を然るべく話して貰ひたいものだ。」

「そりや社長に話すことは譯はないけれども、君！。第一その仕事に取りかゝる丈でも随分資本が要るだらうか？。」

よしんば資本の心配がないとしても、又澤山の資本を費している／＼な困難と戦つても、それで必ず成功出来れば、至極結構な話さ。けれども萬一失敗に終つたら、君、實につまらんぢやアないか？。なにも好んで、そんな危険な橋を渡らなくとも社に居さへすれば、呑氣に暮して行ける位置なんだから、悪いことは言はんよ。フオード君！。今一度考へ直してみたらどうかね。」

「君の親切は、實に嬉しく思ふけれども、どうか暫く僕の希望通りにさせてくれ給へ。」

「言ひだしたが最後、却々聞かないのが、君の性質であることは、既に十分

知つてゐるが、君の幸福を考へると、僕は親友として飽迄も賛成出来ないよ。けれども、たつて君が、辭職するといふならば、社としては仕方がない譯だから、社長には僕から君の意志をもれなく傳へることにしよう！」

ダヴ支配人は、親友としての厚い情誼から、眞情をもつて手をかへ品をかへ色々フォードを説いたけれども確く決心したフォードの心は、その眞情さへも容れる餘裕がなかつたのであつた。

ヘンリー、フォードの辭職に就て、不賛成を唱へたものは、ダヴ支配人ばかりではなかつた。エヂソン會社の社長も、そして彼の多くの同僚も皆心からフォードの復職をせまつたと同時に、又蔭に廻つて

「あんない、地位と、高給をすて、買手もない自動車を拵へるなんて、何といふ馬鹿なんだらう！。まるで狂人の沙汰だ！」

と悪口を言ふ同僚もあつた。そればかりではない。フォードが愈々エヂソン

會社を辭職すると聞いた時、彼の父は、

「お前は、何といふ馬鹿者なんだ！。一ヶ月百三十五弗も貰ふ技師長の地位を捨てるなんて……。一體氣でも狂つたのか？」

能く考へてもみるがい。賣れるかだうか、わかりもしない自動車なぞ拵へて一體だうするつもりなんだ！」

ど子を思ふ親心から悲しみと怒りとに相半した心持で、飽迄もフォードの辭職に不賛成を唱へるのであつた。けれども鐵の様に堅いフォードの決心の前に、如何なる同僚の悪罵も、切なる父の眞情も何の役にもたゝなかつた。

昔も今も同じ様に、子を思ふ親心は、涙のにじむ様に悲痛な思のするものである。實に親ほご世の中に尊く又ありがたいものはない。人一倍孝心の深いヘンリー、フォードの事であるから、父親の切なる心には一も二もなく従ひたかつたであらう！。けれどもその希望さへも容れることの出来ない程、フォード

の心は社會奉仕の至誠で燎えてゐたのであつた。

「やがて目的が達しきへすれば、一層孝行になるんだ。それ迄はお父さんにも忍んで頂かう！」

フオードは、かう決心したのであつた。そして飽迄も自分の目的に向つて一直線に進んで行つた。

もしも、此場合に、ヘンリー、フオードが、眼先の利益を考へる様な狹量の人間だつたら、彼は飽迄も技師長と百三十五弗の高給とに嚙り付いてゐたであらう！。又もしも、フオードが、意志の薄弱な青年であつたならば、周囲のあらゆる人々が皆擧つて不賛成を唱へる様な仕事には、よし一度は思ひたつたとしても手を着けなかつたであらう！。

けれども、ヘンリー、フオードは、やつてみる。必ずやり遂げると決心したことは、何時でも、どんな事でも今迄決して中途で止めなかつたと同じ様に此の場合にも、到る處であらゆる人々から非常に劇しい反對や、聞くに堪へない様な悪罵を蒙つたが、何處迄も一度確めた決心は翻さなかつた。ヘンリー、フオードは、熟慮したことは必ず斷行する勇者である。

「名聲だけを残すよりも、もつとそれ以上に優れたことで、實際に必要な價値のある功業を仕遂げて残す様にしなくては……。」

と子供の時、母から教へられた通りに、フオードは、其の教訓を守つて驀地に進んで行つたのだ。かくてヘンリー、フオードが、エヂソン會社を辭職してから、間もなく父は、

「ヘンリー！。お前は、會社を罷めた以上は、一日も早く自動車を作らなければならぬよ。」

でない、自動車を欲しがつてゐるものは、お前が自動車を作り始めない

内に、皆な他所から買ひ入れて了ふだらう！。すぐ、其の仕事にかゝるがい

と度々催促した。フォードも亦父とは全く違つた心持ではあつたが、一日も早く自動車の製作を始めなくてはならないと焦慮してゐた。けれどもそれには可成澤山の資本が要るので、迎も自分一人の力では目的を達することは出来なかつた。どうしても同志の者を狩り集めて會社を拵へるより外に道はなかつたのである。そこでフォードは、其の運動に晝夜の區別もない程一生懸命に骨を折つた。そしてやつどの思ひでデトロイド自動車會社を創立することが出来た。しかし、此の會社は、フォードの理想を成し遂げるに相應はしいものではなかつた。此の社に集つた多くの株主は、一層良い自動車を世の中の爲に造り出さうとするのではなく、取れるだけ高い値段で賣り付けて唯だ金を儲けようと思つてゐる者ばかりだつた。だからフォードが、出来るだけ良い自動車を拵へ

て出来るだけ安い値段で賣らうといふ申出には、當然誰一人として賛成するものもなかつたことは言ふ迄もない。そればかりではなく、フォードが此の會社から興へられたものは、僅かな持株と技師長といふ位置だけであつた。そこで彼は、色々考へてみると、いくら長く此の會社に居たところで、自分の理想を達する日は到底來ないことが段々にわかつて來た。醜い争鬪を續けたり不愉快な思をするよりは、寧ろ退いて自分の理想に向つて進んだ方が徳策だと考へたので、遂に彼は、千九百二年の三月にデトロイド自動車會社を斷然辭職して了つたのであつた。

人間は、何事でも思ひきりが一番大切である。自分の大事な目的が遂げられないとわかつてゐながら、眼先の利益のために引きづられる様な決斷力の鈍いことでは、迎も大きな事業はやり遂げられるものではない。

ヘンリー、フォードの考へも亦さうであつた。それだからこそ彼は、寢食を

忘れて其の創立に骨を折つた會社をも到頭涙をのんで斷然辭職したのであつた
 それと同時にフオードの辭職が、將來デトロイド自動車會社に大きな破綻を來
 す原因になつたことは言ふ迄もないが、唯だ利益にばかり走つて眼先のことだ
 けしか考へることの出來ない連中は、

「フオード君が辭職してくれたので、これから自分達が思ふ通りに利益が
 得られる。」

と悦んだとは實に愚かなことである。果せるかなデトロイド自動車會社は、
 彼等の豫期通り利益を獲ることは出來ずに寧ろ却て缺損が續いた、そして後に
 入社したリランツ兄弟の私有によつて、カヂラツク自動車會社と改稱して了つ
 た。

ヘンリー、フオードの胸中には、デトロイド自動車會社を辭職した時、既に
 自分の目的を成し遂げる計畫が、立派に出來てゐたのであつた。後年フオード

が、世界の上に莊麗な成功の樓閣を築き上げた、フオード自動車會社が即ちそれ
 である。けれどももし此の場合に、彼の意志が弱く又眼先の利益に走つたとし
 たら、言ふ迄もなく折角苦心して創り上げたデトロイド自動車會社を、恰も弊
 履でも脱ぐ様に捨てはしなかつたであらう！

意志の弱い者は、自分を欺くばかりでなく、又容易に他人からも瞞されるも
 のであるが、意志の強い者は、常に自分の確く信じて居る真理に向つて一直線
 に進んで行く。そしてやがては必ず大きな獲物を捕へずにはおかないものであ
 る。我々の多くは、此の眞理を十分に知つて居る。けれども一向それを實行する
 ことが出來ない。世の中といふ寶の山に入りながら、何時も之といふ寶も獲ず
 に、一生を碌々として遂に空しく墓場に行つて了ふ。實に馬鹿の骨頂である。

人として此の世の中に生れることは、さう二度と再び得られることではな
 い。その尊い人生を碌な事もせず、醒醒暮して了つたのでは、折角人間として生

れて来た所詮がない。だから何人も十分に熟慮し自分が天から授つた才能に最も適した仕事を見出して、フォードの母がフォードに教へた様に、名聲だけを残すよりも、もつとそれ以上に優れたことで、實際世の中に必要な値打のある功業を仕遂げて残す様にしなければならない。

かくて永遠に光り輝く世界の立志傳の中に其の名を留め、僅かに與へられた限りある我々人間の生命を限りなく續く天地とともに悠久に傳へて、何千萬年の後迄も、世界の人人々の規範となる偉大な功業を、此の世の中に遺す様に心掛けるのが、何よりも一番大切なことである。

十四 世界をアツと言はせた九九九號

——魔王の如き勇者バーナー、オールドフィールド——

ヘンリー、フォードは、デトロイト自動車會社を退くと、直ぐパーク小路八十一號地に小さい煉瓦造の工場を買ひ入れ、彼はそこで以前のものよりも、すつと大きくてすつと良い自動車を作らうと考へ、色々研究を重ねて設計をした。やがてそれは何時もの様に獨力で立派に造り上げられた。

これより以前、フォードは、デトロイド自動車會社に關係して居た頃、既に二十臺近くも自動車を拵へ上げたのであるから、彼の惱漿の中には、唯だ具合よく走せるだけでなく、だうすれば十分速力を出すことが出来るかといふことが能く解つてゐた。だから少し研究しなへすれば、世界中の人々をアツと言はせる程高速力を出す自動車を發明することは、フォードにとつては、そんなに困

難なことではなかつた。

丁度その時分、アメリカ国内では、日を逐つて自動車の競争熱がますます旺んに沸騰してゐた時代であつたから、競争に勝つか負けるかで、直ぐその自動車の値打が上つたり下つたりする有様であつた。従つて最も優れた自動車は自然競争車であるといふ思想が、多くの人々の頭に深く植え付けられて居た。そればかりではない、製造人でさへ多くはさう思つてゐた。だから製造家は皆先を争つて出来るだけ高速力を出す競争用の自動車を拵へるのに血眼になつてゐた。なんのことはない、まるで自動車は、競争のために造られてゐる様な妙な現象であつた。

「どうだ、君！此の間の競争も、僕の豫言通りに、〇〇社で拵へた自動車が、到頭一着だつたぢやアないか。」
「うん。確かに〇〇社は、善い自動車を拵へるね。」

といふ様に、誰でも競争のことを話す時には、かういふのであつた。それは甚だ幼稚な思想ではあるが、その頃一般の人々を支配してゐた思想であつたのだ。

ヘンリー、フォードにとつては、かうした誤つた思想は決して嬉しくなかつた。こんなことで自動車の善悪が決められることは、馬鹿らしくもあり又非常に迷惑なことでもあつた。けれども世の中の人々が、誰も皆さう思ひ込んでゐるばかりでなく、製造人迄もさう決め込んでゐる以上、フォードは、自分の拵へた自動車を廣く世の中に知らせ、多くの人々から信用をうけるには、どうしても高速力の自動車を拵へて競争に加はり、あらゆる競争車を打ち負かさなければならぬ破目になつた。

そこで、フォードは、世界中で一番速力の早い飛び脱けた自動車を拵へようといふ大望を懐き、トム、クーバーと一緒になつて高速力を目的とした二臺の

自動車を、千九百三年に到頭拵へ上げた。二臺とも殆んど似通つた型のものであつた。そこで一方を「九百九十九號」と名付け、他の一臺を「矢號」と呼ぶことにした。

もし自動車が、速力だけで此の世の中に知られるものであつたとすれば、何處へ持つて行つても此の二臺は、世界中に知らなければならぬ高速力をもつた自動車であつた。「九百九十九號」も「矢號」もともに非常に大きな四個の汽笛が取り付けてあつて、八十馬力も出すことが出来たので、その爆音は此の時分何處へ行つても聞くことの出来ない程恐ろしいものであつた。汽笛の唸る音響だけでも殆んど人を半殺しにする位だつた。だから此の車を始めて運轉した時には、近所の人々はその音響を聞き非常に喫驚して、不平を言つたり怒つたりするものさへあつた。

此の二臺の自動車は、いづれも唯一人だけの座席があるばかりであつた。それはフオードが、萬一の場合を氣遣つて、一人の生命だけで澤山だと考へたからである。

「クーパー君！。君も乗つてみないか？。」

「勿論乗つてみるつもりだ。しかし君が乗つてゐるのをみてさへ、ヒヤ／＼するんだから、いざ乗つてみたらば、定めし恐ろしい心持がするだらうね？」

「まア、兎に角乗つてみたまへ。そりや逆も言葉では言ひ盡されんよ。」

誰だつて、一度此の車に乗つたならば、ナイヤガラの瀧を渡る位のことは君！。ホンの遊び事の様なものだよ！。」

とフオードは言つたが、それは適評であつた。それ程に恐ろしい高速力を出す自動車であつたのだ。クーパーは、フオードから注意されたので十分支度をしてから、九百九十九號上の人となつた。そこでフオードが始動曲柄を廻して動力を加へると、凄じい爆音を立て砂煙を立て、走りだした。次第に速力が加

へられると疾風迅雷、眼も眩まんばかり、今迄此の世で見たこともない程の高速力で飛んで行つた。成程誰でも一度此の自動車に乗つたならば、實際ナイヤガラ（ナイヤガラ）の瀑布を渡る位は、全く遊び事だと、クーバーも熟々感じたのであつた。だから若し少しでも油断して居ようものなら、人一人の生命を失ふ位のことは何でもないのであつた。

フオードもクーバーも、二臺の車に夫々乗つてみた。全速力で飛ばしてみたけれども二人とも此の車に乗つて競争に出る責任を負ふ氣には到底なれないと言つた。それにフオードはその時既にフオード自動車會社を創立すること（フオード自動車會社）で忙しかつたので、猶更選手として出場することは困難であつた。

「ねえ。クーバー君！君も僕も、二人とも競争に出ないとすると、折角一生懸命に拵へ上げて、此の車の威力を世の中に示す機會が、當分來ないわけだね。」

「いや。その心配なら無益だ。それには、極適當な人物を僕が知つてゐる。」
「一體、誰だね？」

「ソートレーキ市に住んでゐるバーネー、オールドフィールドといふ男なんだが、僕とは親しい間柄なんだから、事情を話せば必ず引受けてくれるよ。」

「さうか。しかし其の男に此の車が操縦出来るかね？」
「うん。バーネーなら、きつとやれると思ふ。バーネーはねえ。名高い自轉車の選手だよ。殊に其の豪膽極まること驚く外はない人間だから操縦さへ教へてやれば、必ずやつてのけるだらうと思ふんだがね。」

「さういふ人間なら、或はやれんこともあるまい。けれども、此の車は外の自動車と違つて、いざ競争に出る段になれば、だうしたつて生命がけでなくちやア乗れないのだから、一應本人を呼んで相談したらだうかね？」

「さうだ、それが一番上分別だ。ちやア君！早速電報を打つてバーネーを